

洲本市

清間遺跡 三木田池遺跡

—主要地方道 洲本五色線(三木田バイパス)道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成27(2015)年3月

兵庫県教育委員会

清間遺跡・三木田池遺跡

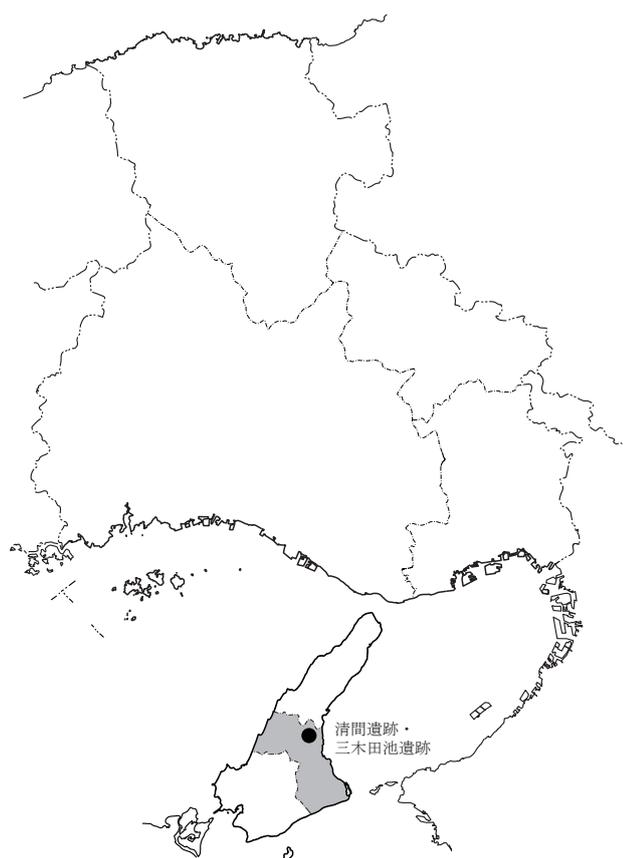
兵庫県文化財調査報告 第476冊

兵庫県教育委員会

洲本市

清間遺跡 三木田池遺跡

－ 主要地方道 洲本五色線（三木田バイパス）
道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －



平成27（2015）年3月

兵庫県教育委員会



遺跡の位置および周辺の航空写真（1974年撮影、1/7,000）



調査箇所遠景（北上空から）



調査箇所遠景（東上空から）



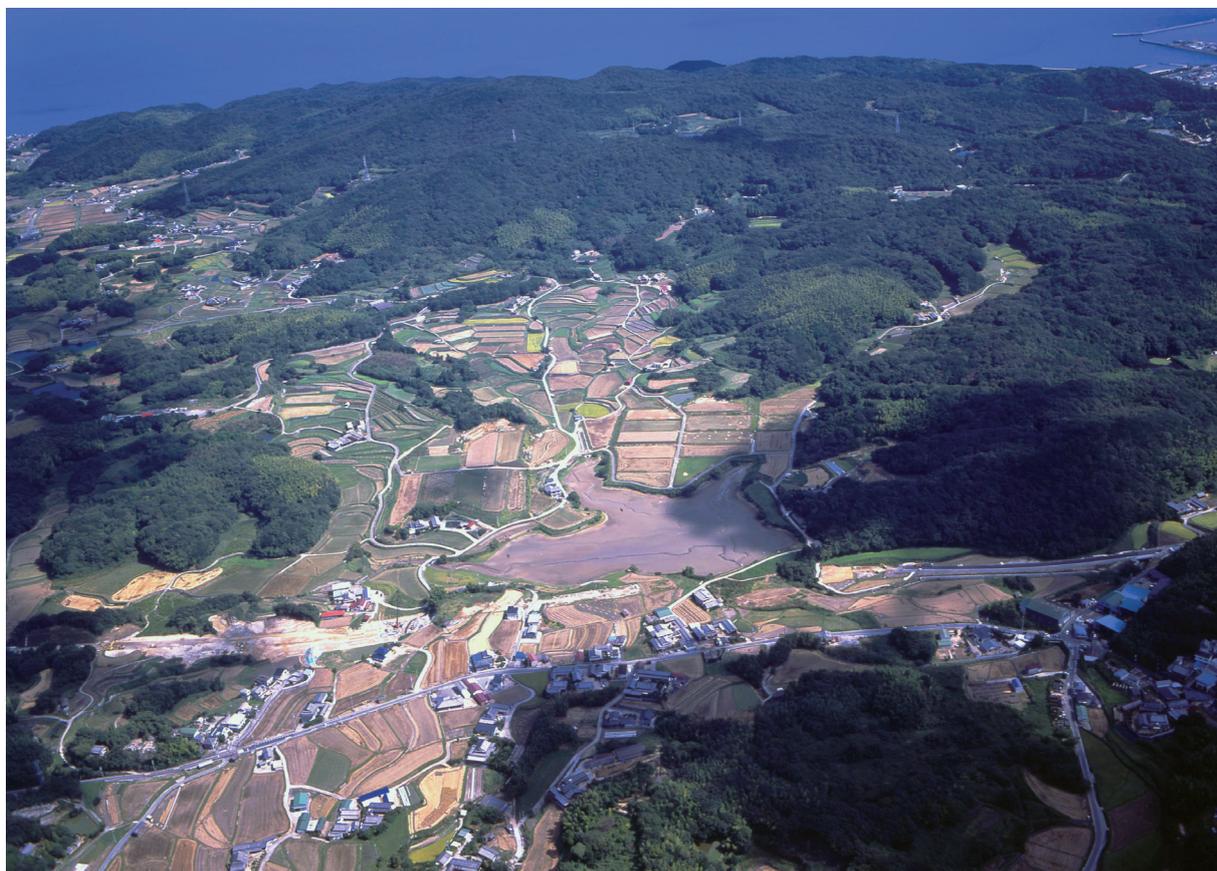
調査箇所遠景（南上空から）



調査箇所遠景（南西上空から）



調査区遠景（東上空から）



調査区遠景（西上空から）



清間遺跡 調査区全景（南上空から）



清間遺跡 調査区全景（真上上空から）



清間遺跡 遺構集中部（東南東から）



清間遺跡 西壁土層断面（南東から）



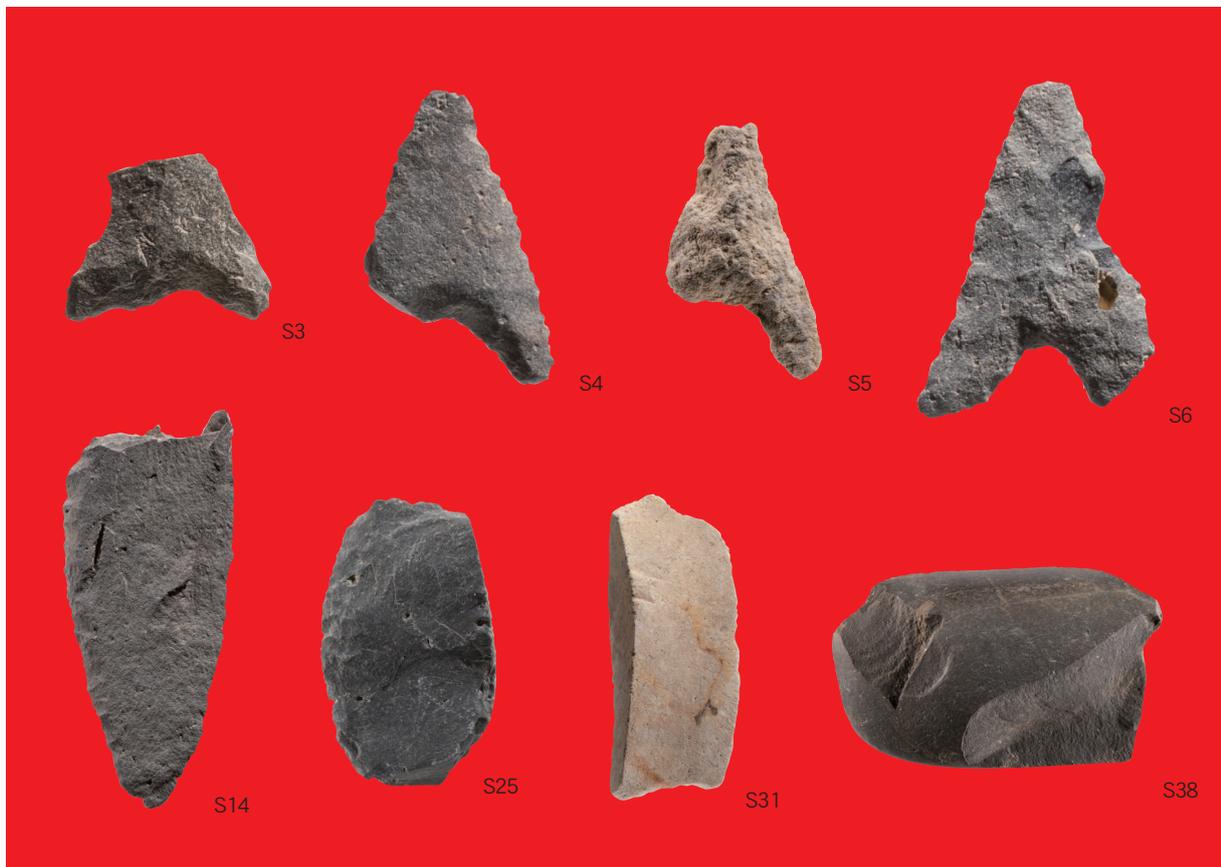
三木田池遺跡 調査区全景（西上空から）



三木田池遺跡 調査区全景（南上空から）



三木田池遺跡 出土石器



三木田大池 採集の石器

例 言・凡 例

1. 本書は洲本市中川原町三木田に所在する、清間遺跡・三木田池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査および出土品整理・調査報告書作成作業は、主要地方道 洲本五色線（三木田バイパス）道路改良事業に伴い、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、原田建設株式会社に工事委託（下請業者は株式会社マツダ建設）して実施し、調査区の空中写真測量は株式会社日建技術コンサルタントに委託して実施した。
4. 本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したものを、遺物写真については株式会社クレアチオに委託して撮影したものを使用した。
5. 本書の執筆は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部の岸本一宏と久保弘幸（石器）がおこない、編集は同非常勤嘱託員の池田悦子の協力を得て岸本がおこなった。
6. 発掘調査・報告書作成にあたり、地元自治会をはじめ、洲本市教育委員会の浦上雅史（当時）・金田匡史氏のご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表します。

本 文 目 次

第1章 はじめに

第1節 遺跡をとりまく環境

1. 地理的環境 1
2. 歴史的環境 1

第2節 調査の経緯・経過

1. 発掘調査 5
2. 出土品整理 6

第2章 調査結果

第1節 清間遺跡

1. 調査区の概要 7
2. 調査区の土層と検出遺構 7
3. 出土遺物 9
4. 小 結 10

第2節 三木田池遺跡

1. 調査区の概要 11
2. 調査区の土層と検出遺構 11
3. 出土遺物 12
4. 小 結 14

第3章 総 括

- 第1節 清間遺跡 15

- 第2節 三木田池遺跡 16

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版 1	遺跡の位置および周辺の航空写真	巻頭写真図版 5 上	清間遺跡調査区全景（南上空から）
巻頭写真図版 2 上	調査箇所遠景（北上空から）	下	清間遺跡調査区全景（真上空から）
下	調査箇所遠景（東上空から）	巻頭写真図版 6 上	清間遺跡遺構集中部（南東から）
巻頭写真図版 3 上	調査箇所遠景（南上空から）	下	清間遺跡西壁土層断面（南東から）
下	調査箇所遠景（南西上空から）	巻頭写真図版 7 上	三木田池遺跡調査区全景（西上空から）
巻頭写真図版 4 上	調査区遠景（東上空から）	下	三木田池遺跡調査区全景（南上空から）
下	調査区遠景（西上空から）	巻頭写真図版 8 上	三木田池遺跡出土石器
		下	三木田大池採集の石器

挿図・表目次

第 1 図	周辺の遺跡	3	第 1 表	周辺の遺跡名表	3
第 2 表	清間遺跡・三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器一覧表	14			

図版目次

図版 1	清間遺跡・三木田池遺跡の位置	図版 8	三木田池遺跡調査区平面図
図版 2	清間遺跡調査区の位置	図版 9	三木田池遺跡調査区西側壁土層断面図
図版 3	清間遺跡調査区平面・遺構埋土土層断面図	図版 10	三木田池遺跡 S B - 1 平面・断面図
図版 4	清間遺跡調査区西側壁土層断面図	図版 11	三木田池遺跡出土遺物
図版 5	清間遺跡 S B - 1 平面・断面図	図版 12	三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器(1)
図版 6	清間遺跡出土遺物	図版 13	三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器(2)
図版 7	三木田池遺跡調査区の位置	図版 14	三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器(3)

写真図版目次

写真図版 1 上	清間遺跡調査区全景（北上空から）	写真図版 8 上	三木田池遺跡調査区全景（東上空から）
下	清間遺跡調査区全景（西上空から）	下	三木田池遺跡調査区全景（北上空から）
写真図版 2 上	清間遺跡調査区西半部（南東から）	写真図版 9 上	三木田池遺跡調査区全景（南から）
下	清間遺跡調査区全景（北西から）	下	三木田池遺跡調査区全景（北東から）
写真図版 3 上	清間遺跡調査区全景（南東から）	写真図版 10 上	三木田池遺跡 S B - 1 全景（東から）
下	清間遺跡遺構集中部（南から）	下	三木田池遺跡調査区西側壁土層断面（東から）
写真図版 4 ①	清間遺跡 SK-1 埋土土層断面（南西から）	写真図版 11 ①	三木田池遺跡石器 S27 出土状況（南から）
②	清間遺跡 SK-1 完掘後全景（南東から）	②	三木田池遺跡 3カケ割片出土状況（南西から）
③	清間遺跡 SD-1 東部埋土土層断面（南東から）	③	三木田池遺跡 削器 S 13 出土状況（北から）
④	清間遺跡 SD-1 西部埋土土層断面（南東から）	④	三木田池遺跡 磨石 S 41 出土状況（東から）
⑤	清間遺跡 SD-2 埋土土層断面（南から）	⑤	三木田池遺跡 磨石 S 40 出土状況（北から）
⑥	清間遺跡 SD-3 埋土土層断面（南西から）	⑥	三木田池遺跡 敲石 S 39 出土状況（北東から）
⑦	清間遺跡 SD-4 東部埋土土層断面（南東から）	⑦	三木田大池石器採集地点 1 遠景（南から）
⑧	清間遺跡 SD-4 西部埋土土層断面（南東から）	⑧	三木田大池石器採集地点 1 遠景（南西から）
写真図版 5 上	清間遺跡出土土器類（外面）	写真図版 12 上	三木田池遺跡出土土器等（外面）
下	清間遺跡出土土器類（内面）	下	三木田池遺跡出土土器等（内面）
写真図版 6 上	清間遺跡出土銅製品	写真図版 13	三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器(1)
下	清間遺跡出土土師器	写真図版 14	三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器(2)
写真図版 7 上	清間遺跡出土金属器（A 面）	写真図版 15	三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器(3)
下	清間遺跡出土金属器（B 面）		

第1章 はじめに

第1節 遺跡をとりまく環境

1. 地理的環境

清間遺跡および三木田池遺跡は、淡路島の洲本市北部で中川原町域南山間部の谷状地形域に位置する。

淡路島の南東部に位置する洲本市は、論鶴羽山地に源を発し、北東方向に流れる洲本川に開析された平野部を有するが、北側と南側を山地で挟まれた谷状の地形ともいえ、洲本川北岸と南岸ではその地質が大きく異なっている。

洲本川の北岸では中生代白亜紀新世に形成された領家新期花崗岩類Ⅱの花崗閃緑岩で覆われ、その中央部の谷状部分に新生代第四紀更新世の大阪層群下部亜層群がちょうど挟まれたかたちになって堆積しており、中・低位段丘層が認められる。このように、河口付近の北岸と中流域の北岸では地質が異なっており、洲本川の河口付近北岸では軟質花崗岩によりその風化土による沖積化が激しく、急峻な崖状地形になっているところが多い。いっぽう、洲本川南岸では論鶴羽山地を形成する中生代白亜紀新世末期の和泉層群の北阿万累層の砂岩・泥岩互層と礫岩で構成され、比較的硬質で開析はあまり激しくなく、傾斜面は洲本川北岸に比較して緩やかな傾斜になっているところが多い。また、洲本川南岸の平地部分には新生代第四紀更新世の大阪層群下部亜層群が堆積し、中・低位段丘層が発達している部分が多い。

さて、清間遺跡・三木田池遺跡が存在する洲本川下流域北側では、標高約450mの先山をピークとする花崗閃緑岩の山塊東端に先山断層が南北に走り、その東側の大阪層群下部亜層群部分では、標高100m前後から東方に向かって緩やかに低くなる傾斜地で、その幅は約1.5kmあり、南東～北東といった方向に開析する小支谷が数多く認められる。ただし、その小支谷を流れる小河川は、三木田大池の北約1kmに存在する東西～南東方向の尾根稜線状の最高点を境として南北二方向に分かれ、南は洲本川、北は洲本市安乎町平安浦の岩戸川を経て共に大阪湾に注ぐ。

2. 歴史的環境

洲本市から南あわじ市にかけての平野部には多数の集落跡・古墳などが存在しているが、集落跡や散布地は弥生時代のもものが大半である。また、洲本市中川原町の内陸部盆地においては、前述のように低位な地形であったことから、洲本地域から旧津名郡津名町（現淡路市）方面へ抜ける内陸の街道として利用されていたと思われ、弥生時代の遺跡が目立って存在していることが特徴的である。それらのうち、清間遺跡（1）および三木田池遺跡（2）は弥生時代の散布地として、西の下遺跡（3）とともに他の遺跡とはやや離れた位置に集中的に存在している。清間遺跡は弥生時代中期～後期の土器が、三木田池遺跡では石器・剥片が採集されていた。ただし、洲本市北部の内陸部盆地では弥生時代の遺跡や古墳が多いにもかかわらず、古墳時代の集落跡があまり多くないことが特徴的で、このことは三原平野も含めた淡路全般にもいえることである。

清間遺跡・三木田池遺跡が存在する洲本市域では、各時代にわたって数多くの遺跡が存在しており、それらについては本四道路関連や国道・県道関連の遺跡調査報告書において述べられているため、以下

では清間・三木田池遺跡に直接関連する縄文時代～弥生時代および奈良時代～中世の遺跡に加え、古墳や古墳時代の遺跡といった周辺の歴史的環境について述べることにする。

周辺の縄文時代遺跡

洲本市域の縄文時代の集落跡は北部の安乎浦塩入遺跡（56）と平安浦遺跡（57）および市街地に近い洲本川北岸の武山遺跡（77）の3遺跡をあげうるにすぎない。このうち平安浦遺跡は縄文時代～中世にかけての複合遺跡で、武山遺跡も縄文時代～弥生時代・平安時代の複合遺跡となっている。

周辺の弥生時代遺跡

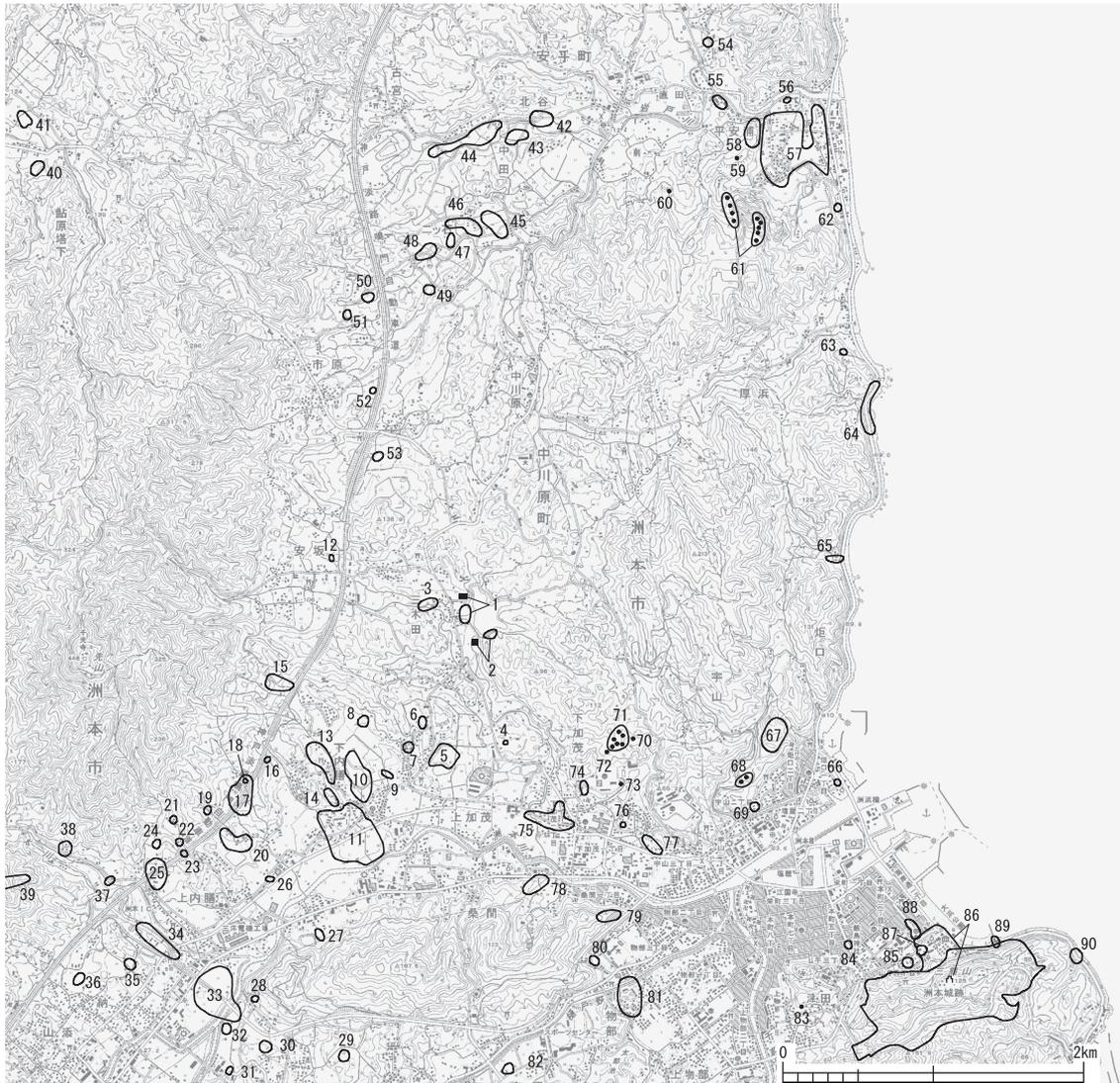
洲本市周辺の弥生時代の集落跡および散布地は、北部の海岸付近に存在する先述の平安浦遺跡があり、弥生前期の環濠集落の可能性のある安乎間所遺跡もその範囲に含まれる。市街地周辺の洲本川の南側では宮崎遺跡（90）が生産遺跡で、旧城内遺跡（87）では弥生時代～古墳時代の遺跡で、製塩土器や箱式石棺が発見されている。ほかに山下町遺跡（85）、居屋敷遺跡（84）、後期末の馬木遺跡（81）、中期末～後期前半の亀谷山遺跡（79）や尾崎遺跡（78）が丘陵末端部の散布地として存在している。

洲本川北岸の平野部や丘陵端には、東から脇遺跡（69）、空の谷遺跡（76）が散布地として存在し、武山遺跡や中期末～後期前半の住居跡が発見された下加茂岡遺跡（74）、下内膳遺跡（11）が集落跡、武山遺跡では前期前半の壺と中期初頭の円形周溝墓、下加茂遺跡（75）では中期の方形周溝墓群や水田跡も発見されている。前期末の溝が検出された下内膳遺跡は後期の水田や水路も発見され、中世へと続く大規模な集落跡である。下内膳遺跡の北側山麓部および台地上の集落跡には、中期末の大谷遺跡（6）、後期後半～末の毛次遺跡（7）・由良木遺跡（8）・曇華池遺跡（10）、後期前半の西の森遺跡（13）、後期前半～後半の中津原遺跡（15）や、大森谷遺跡（17）、森遺跡（25）、寺中遺跡（34）が存在しており、竪穴住居跡は由良木遺跡で1棟、中津原遺跡では11棟調査されている。本四道路で調査された大森谷遺跡は後期前半の住居跡が存在し、中世まで続く複合遺跡で、森遺跡では古墳時代の住居跡と中世の集落が重複している。寺中遺跡では中期末および後期末の住居跡と後期末の方形周溝墓群が発見されている。散布地では野上遺跡（16）、新白遺跡（18）、大森谷浜田遺跡（19）、大森谷里池遺跡（20）、尾筋丸山遺跡（21）、尾筋岡遺跡（22）、ハタ遺跡（24）、二反田遺跡（36）、大西遺跡（37）が同じ立地条件の山麓部および台地上に存在しており、さらに山間の奥まった位置には散布地の薬師遺跡（38）が存在している。いっぽう、低地部分に存在する波毛遺跡（33）では住居跡のほか弥生前期から中世にいたる複合遺跡であり、弥生時代末の水田跡も調査された。ほかに低地部分の遺跡には栗林遺跡（30）、寺田遺跡（31）、戸狩遺跡（32）が存在している。寺田遺跡は古墳時代の散布地でもある。

さらに北側の山間部のうち、中川原町・安乎町域では伝銅鐸出土地である中川原遺跡（49）があり、菱環鈕式の古式鐸で、南あわじ市津井の隆泉寺の中川原銅鐸がそれとされている。集落跡として五十田遺跡（50）、戎ノ前遺跡（48）、鉦屋遺跡（47）、大寺ヶ市遺跡（46）、上人ヶ市遺跡（45）、古屋開手遺跡（44）があり、中期の遺跡が多い。調査された戎ノ前遺跡では後期前半の円形住居跡が重複も含めて15棟検出され、赤色顔料生産にかかる石杵も出土し、戎ノ前遺跡は旧石器・平安・中世の、古屋開手遺跡は平安・中世との複合遺跡である。なお、五色町の鮎原にも弥生遺跡が存在しており、散布地である竹ノ下遺跡（40）が第1図の範囲に存在している。

周辺の古墳時代遺跡

古墳時代の遺跡のうち、集落跡や散布地には前述の平安浦遺跡、武山遺跡、旧城内遺跡、大森谷遺跡、寺田遺跡や竪穴住居跡が検出された下内膳遺跡・森遺跡・波毛遺跡のほか、平野部に平安時代までの複



第1図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡名表

1 清間遺跡	24 ハタ遺跡	47 鉦屋遺跡	70 宇山古墳
2 三木田池遺跡	25 森遺跡	48 戎ノ前遺跡	71 下加茂岡群集墳
3 西の下遺跡	26 方城遺跡	49 中川原 (伝銅鐸出土地)	72 コヤダニ古墳
4 バベの森古墳	27 桑間ナカダ遺跡	50 五十田遺跡	73 下加茂岡古墳
5 里池遺跡	28 先山古墳	51 神子ヶ原遺跡	74 下加茂岡遺跡
6 大谷遺跡	29 庄慶陶瓦窯跡	52 摺井遺跡	75 下加茂遺跡
7 毛次遺跡	30 栗林遺跡	53 オヶ本遺跡	76 空の谷遺跡
8 由良木遺跡	31 寺田遺跡	54 直田遺跡	77 武山遺跡
9 コカイテ遺跡	32 戸狩遺跡	55 城腰城跡	78 尾崎遺跡
10 曇華池遺跡	33 波毛遺跡	56 安乎浦塩入遺跡	79 亀谷山遺跡
11 下内膳遺跡	34 寺中遺跡	57 平安浦遺跡	80 亀谷古墳
12 新池遺跡	35 鴨根原遺跡	58 安乎八幡裏群集墳	81 馬木遺跡
13 西の森遺跡	36 二反田遺跡	59 高倉山古墳	82 宇原大坪遺跡
14 安宅館跡	37 大西遺跡	60 平安浦岡古墳	83 曲田山古墳
15 中津原遺跡	38 薬師遺跡	61 厚浜台群集墳	84 居屋敷遺跡
16 野上遺跡	39 羽風山城跡	62 安乎大浜遺跡	85 山下町遺跡
17 大森谷遺跡	40 竹ノ下遺跡	63 石風呂古墳	86 洲本城跡
18 新白遺跡	41 土橋遺跡	64 名子の浜遺跡	87 旧城内遺跡
19 大森谷浜田遺跡	42 中山遺跡	65 石ヶ谷遺跡	88 山下町居屋敷遺跡
20 大森谷里池遺跡	43 中田栗林遺跡	66 炬口台場跡	89 霞台場跡
21 尾筋丸山遺跡	44 古屋開手遺跡	67 炬口城跡	90 宮崎遺跡
22 尾筋岡遺跡	45 上人ヶ市遺跡	68 宇山牧場古墳群	
23 向上遺跡	46 大寺ヶ市遺跡	69 脇遺跡	

合遺跡である曇華池遺跡（10）が、北部の内陸部では中山遺跡（42）、中田栗林遺跡（43）が認められ、中山遺跡は奈良時代、中田栗林遺跡では平安時代の集落と複合している。また、製塩遺跡では安乎大浜遺跡（62）、名子の浜遺跡（64）、石ヶ谷遺跡（65）があり、窯跡では、奈良時代まで続く庄慶陶瓦窯（29）がある。

古墳では、大正年間に五銖銭5枚と素文鏡1点を含め鏡4点などが出土した宇山1号墳がある宇山牧場古墳群（68）や淡路で唯一三角縁神獸鏡を副葬していたコヤダニ古墳（72）が前期古墳で、緑泥片岩の箱式石棺を有する下加茂岡古墳（73）は紀伊との関連で注目され、バベの森古墳（4）も緑泥片岩を用いた箱式石棺と推定されている。また、高倉山古墳（59）は板石3枚が確認されていることから箱式石棺である可能性が高い。なお、現在のところ中期古墳は確認されていない。

横穴式石室では、淡路最大の石室規模を有する曲田山古墳（83）が市街地南部に単独で存在しており、コヤダニ古墳とともに古墳時代には洲本市付近が中心であったことを物語っている。ほかに横穴式石室墳として、安乎八幡裏群集墳（58）は9基で構成され、厚浜台群集墳（61）では12基以上で構成されている。平安浦岡古墳（60）や海岸近くに立地する石風呂古墳（63）も横穴式石室墳で、洲本市街地周辺では下加茂岡群集墳（71）、宇山古墳（70）、亀谷古墳（80）、先山古墳（28）が認められる。

周辺の奈良時代遺跡

奈良時代の遺跡には集落跡・散布地として前述の中山遺跡、曇華池遺跡、平安浦遺跡、馬木遺跡、下内膳遺跡、大森谷遺跡、波毛遺跡のほか、山下町居屋敷遺跡（88）、里池遺跡（5）、宇原大坪遺跡（82）、向上遺跡（23）、鴨根原遺跡（35）があり、曇華池遺跡では治水灌漑施設・水田跡や掘立柱建物跡が検出されている。下内膳遺跡では掘立柱建物跡、里池遺跡はやや内陸の製塩遺跡であり、山下町居屋敷遺跡は中世まで、宇原大坪遺跡は平安時代との複合遺跡である。奈良時代の遺跡数は多くはないが、大野所在の窯跡では、飛鳥時代から奈良時代まで続く庄慶陶瓦窯があり、大野窯跡群中の土生寺窯では藤原宮と同範の軒平瓦を生産しており、大野官林の窯では平安時代後期に瓦が焼成されていた。

周辺の平安時代遺跡

平安時代遺跡では、前述の平安浦遺跡、武山遺跡、下内膳遺跡、大森谷遺跡、波毛遺跡、戎ノ前遺跡、古屋開手遺跡、曇華池遺跡、中田栗林遺跡、山下町居屋敷遺跡、宇原大坪遺跡に加え、散布地の安乎大浜遺跡（62）、西の森遺跡（13）があげられる。遺跡数としてはあまり多くない。下内膳遺跡では官人的性格のある豪族居館跡とされている掘立柱建物跡が検出されている。

周辺の中世遺跡

中世の遺跡には今回調査した清間遺跡・三木田池遺跡のほか、前述の平安浦遺跡、下内膳遺跡、中津原遺跡、大森谷遺跡、森遺跡、波毛遺跡、戎ノ前遺跡、山下町居屋敷遺跡のほか、集落・散布地としてコカイチ遺跡（9）、新池遺跡（12）、オヶ本遺跡（53）、摺井遺跡（52）、神子ヶ原遺跡（51）をあげることができる。コカイチ遺跡では掘立柱建物跡・鍛冶遺構が検出されており、鍛冶遺構は由良木遺跡でも発見されている。また、戎ノ前遺跡でも多数の掘立柱建物跡が発見されている。いっぽう、中世城郭には城腰城跡（55）、炬口城跡（67）、洲本城跡（86）、羽風山城跡（39）が第1図の範囲内に存在し、五色町の鮎原塔下には戦国期の白巢状跡があり、備前焼の壺や播鉢、土師器、鉄釘、銅銭等が出土している。

なお、近世の台場跡として炬口台場（66）や霞台場跡（89）が海岸線部分に認められる。

第2節 調査の経緯・経過

1. 発掘調査

(1) 調査の経緯

兵庫県淡路県民局洲本土木事務所による、主要地方道 洲本五色線（三木田バイパス）道路改良事業の工事予定地範囲内での埋蔵文化財のうち、周知の遺跡の清間遺跡およびその隣接地について平成23年度末に確認調査を実施した結果、溝を検出し、同時に土師器等の遺物も包含層から出土した。

また、周知遺跡の三木田遺跡の隣接地についても平成23年度末に確認調査を実施した結果、柱穴を検出し、同時に土師器等の遺物も包含層から出土した。

これら平成23年度の調査結果から、清間遺跡・三木田池遺跡の両遺跡について、洲本土木事務所長からの依頼[平成24年6月19日付け淡路（洲土）第1326号]により本発掘調査を実施することとなった。

両遺跡の本発掘調査は平成24年8月16日から開始し、調査の順序としては清間遺跡からとりかかった。ただし、清間遺跡の調査の進行に支障のない時期の8月末に、三木田遺跡の表土の機械掘削も開始した。その後、清間遺跡の調査は9月25日に、三木田遺跡については10月13日に終了した。

清間遺跡および三木田池遺跡の確認調査・本発掘調査の発掘調査期間・調査面積・調査実施機関・担当者および兵庫県が設定した遺跡調査番号は以下のとおりである。

確認調査：清間遺跡（三木田池遺跡） 平成24年3月27・28日（62㎡）（遺跡調査番号：2011390）

実施機関：兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

担当者：調査第1課 渡辺 昇・久保弘幸

本発掘調査：清間遺跡 平成24年8月16日～9月25日（559㎡）（遺跡調査番号：2012086）

三木田池遺跡 平成24年8月29日～10月13日（700㎡）（遺跡調査番号：2012087）

実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

担当者：調査第1課 長濱誠司、調査第2課 岸本一宏、調査補助員：前田陽子

(2) 調査の経過

清間遺跡 清間遺跡は北西から南東方向にのびた低く細い丘陵尾根の南側斜面を中心に存在している。

確認調査を実施するまでの清間遺跡の範囲は、今回の本調査区よりも南側にあたる、同一丘陵尾根の南東端および三木田大池から続く南西方向の谷状地形の部分であったが、周知遺跡の範囲内にまで確認調査を実施した結果、その部分では開墾による削平が進んでおり、遺構や顕著な遺物が発見されなかったことから、本発掘調査対象地区から除外された。

今回実施した清間遺跡の本発掘調査区は、これまでの遺跡範囲の北側にあたる、北西から南東方向にのびた低く細い丘陵尾根の南東端に位置する水田2筆分で、道路本線部分に加えて、関連工事で田面を削り下げる隣接水田部分を含んでおり、調査面積は559㎡である。なお、調査区外の南側に検出遺構が続いて存在していることがほぼ確定したが、調査を実施することはできなかった。

三木田池遺跡 三木田池遺跡の確認調査時点まで周知されていた遺跡の範囲は、三木田大池の南側に面した丘陵の北向きの斜面および山裾から三木田大池汀線までであり、今回の本発掘調査区は三木田大池の南西部にある池堤の南端からさらに西南側に下がった部分で、これまでの遺跡の範囲から西側に約40m離れており、三木田大池の樋口から流れ出る谷川に面した南側部分に位置している。調査区平面形は、

方位方向に沿った矩形を呈し、面積は700㎡である。調査区大半が水田1筆分で、北東側に存在する一段高い水田も一部含んでいる。

(3) 調査の方法

清間遺跡の調査は、耕土がすでに除去されていたため遺物包含層上面までの堆積土を、三木田遺跡については耕土および堆積土のうちの遺物包含層上面まで、それぞれバックホーにより掘削した。その後、遺物包含層以下を人力により掘削し、同時に包含層中に含まれていた遺物の回収につとめた。なお、掘削土は清間遺跡については調査区北側、三木田遺跡については調査区南側の用地内に集積した。

遺物包含層の下面は中世中頃と思われる遺構面となっており、清間遺跡では赤褐色～黄褐色を呈し、三木田遺跡では黄褐色～黄灰褐色を呈していた。包含層掘削の後、人力により表面を精査して遺構検出を実施し、柱穴や溝などを検出した。その後、柱穴などの検出遺構の掘削を人力によりおこなった。

なお、人力掘削土はベルトコンベアにより搬出し、機械掘削土と同じ位置に集積した。

検出・掘削した遺構については調査区全体の平板実測、調査区壁面の土層断面実測をおこない、個別遺構の埋土土層断面図作成や、遺物出土状況および個別遺構の平面・断面の写真撮影を実施し、広範囲の写真については高所作業車を用いて撮影した。また、調査区全体についての空中写真測量を株式会社日建技術コンサルタントに委託して実施した。

なお、調査の過程において平成24(2012)年10月13日(土曜日)に地元住民を対象とした説明会を三木田遺跡中心に実施した結果、約30名の方々が見学に来られた。

地元説明会開催後には、遺構内の遺物の取り上げと、柱穴掘形の完掘をおこない、写真撮影および土層断面の実測図作成をおこなった後、調査を終了した。

2. 出土品整理

出土品整理事業は平成26(2014)年度に実施した。

平成24(2012)年度以降、兵庫県立考古博物館の埋蔵文化財調査部門が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に移ったため、その機関で実施したが、実施場所は兵庫県立考古博物館であった。

作業内容・担当者は以下のとおりである。

平成26(2014)年度 実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部 整理保存課

作業内容：水洗、ネーミング、接合・補強、復元、金属器保存処理、実測、遺物写真撮影、

写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷

作業担当職員：菱田淳子・長濱誠司(作業進行管理)、岡本一秀(金属器保存処理)

岸本一宏(作業指示・編集・原稿執筆)、久保弘幸(石器原稿執筆)

作業担当非常勤嘱託員：池田悦子(実測、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト)

古谷章子(デジタルデータ図の編集)

荻野麻衣・島村順子・小野潤子・平宮可奈子・上西淳子・沼田真奈美

(接合・補強、復元)

桂 昭子・佐々木愛・梶原奈津子(金属器保存処理)

第2章 調査結果

第1節 清間遺跡

1. 調査区の概要 (図版1～3、巻頭写真図版1～5、写真図版1・2)

遺跡は北西から南東方向にのびた低く細い丘陵尾根の南側斜面を中心に存在しており、平成23年度に確認調査を実施した結果、尾根稜線に近い南側斜面で溝を検出し、包含層から土師器等が出土した。

本発掘調査区はその尾根の南東端に位置し、道路本線部分に加えて、関連する工事で田面を下げる隣接水田部分を含んでおり、上下に分かれた水田2筆分で東西に長い矩形で、面積は559㎡である。

調査区のほぼ全域にわたって柱穴や溝等を検出したが、柱穴は主として調査区南西部に集中した状態であった。遺構の時期は中世中頃のものとして推定される。下段では西半部に偏って掘立柱建物跡と多数の柱穴および溝を検出した。溝は掘立柱建物跡と並行方向であることから、建物跡に伴う可能性がある。

掘立柱建物跡は南北2間(6.0m)以上、東西2間(6.0m)以上の総柱建物跡で、西側用地外および南側調査区外にひろがっている。溝や柱穴から出土した遺物により、時期は中世中頃であると思われる。また、掘立柱建物跡の東側には建物と平行して南北に並ぶ柱穴が存在しており、建物跡に関連する堀や柵が併設されていた可能性がある。

2. 調査区の土層と検出遺構

調査区は東西に長く、北側が南側よりも約60cm高い、上下2段の調査区で、それぞれの遺構面は南側に少し傾斜している。

(1) 調査区の土層 (図版4、巻頭写真図版6下)

北側上段水田では、現耕土下に第2層である10YR5/3 にぶい黄褐色でやや砂質の旧耕土が厚さ約18cm認められ、その下層の10YR5/4 にぶい黄褐色の第3層も旧耕土で、18cm前後の厚さで存在していた。

その下層の堆積層である第4層は遺物包含層で、10YR3.8/1.7 灰黄褐色を呈しており、この包含層は厚さ15cm程度で、調査区上段に存在していた溝SD-4はこの層を切り込んでいた。また、第4層の下層にある厚さ22cm程度の10YR4.5/2 灰黄褐色のやや砂質の堆積土(第5層)にも遺物を含んでおり、これも包含層になっていた。この層は調査区上段の北端までは広がっていなかった。第5層の下層には第6層が8cm程度の厚さで認められたが、10YR4.5/2.4 灰黄褐色を呈するやや粘質土層で、その下層に存在する地山の第7層の9YR6/7 明黄褐色を呈する粘質の土層上部が土壌化した部分と判断している。

南側下段水田では、耕土が2層に分かれており、下層耕土は厚さ約10cmで上下耕土を合わせると20cm以上の厚さとなる。その下層には上段の第2層と同色・同質の旧耕土が厚さ約10cmで認められた。さらにその下層にも上段の旧耕土である第3層と同色・同質の旧耕土が厚さ12cm前後で認められた。その下層は第7層の地山遺構面であるが、下段の南半部には第4層・第5層の遺物包含層が認められ、奈良～平安時代前期や中世の土器片や金属器が包含されていた。

(2) 調査区検出遺構 (図版3・5、巻頭写真図版5・6、写真図版1～4)

本発掘調査の結果、掘立柱建物跡1棟のほか調査区のほぼ全域にわたって柱穴や溝等を検出したが、

掘立柱建物跡および柱穴は調査区南西部に集中した状態であり、掘立柱建物跡と柱穴は調査区外西側の道路用地外および調査区南側の道路用地内にあるもう1段低い水田部分にも続いていることは明らかであったが、調査を実施することができなかった。なお、遺構の時期は中世中頃のものとして推定される。

上段では現水田畦畔と並行方向の溝1条（SD-4）と柱穴数基を検出したにとどまる。SD-4は幅1.0～1.5mで、深さは10～30cmあり、長さ約34mにわたって検出し、さらに北西側の用地外に続いている。溝の東端は南東方向に分岐し、遺構面の傾斜とともに自然消滅している。溝底の深さは、僅かに西側が高くなっていることから東流しているものと思われるが、水が常時流れていた状況ではない。埋土は、西側では10YR5/2 灰黄褐色のシルト質細砂～極細砂であるが、東部では図版3の第3層が西側埋土と同一で、その下層に第5層の2.5Y6/2 灰黄色のシルト質細砂～極細砂とその中央に第4層の10YR6/1 褐灰色土層が堆積していた。溝埋土からは図版6に示した石鏃（S1）、付近の包含層から唐津焼と思われる破片（図版6-9）が出土した。なお、この溝は検出層位から近世の可能性はある。

下段で検出した遺構には掘立柱建物跡1棟（SB-1）および堀または柵跡、東西溝（SD-1）、南北溝（SD-2・3）、土壇および多数の柱穴がある。これらの遺構は主として調査区下段の西半部に偏って存在していた。

SB-1は調査区西端で検出し、南北2間（6.0m）以上、東西2間（6.0m）以上の総柱建物跡で、西側用地外および南側調査区外にひろがっている。南北柱間は2.35m～2.53m、東西方向では1.80m～2.23mと南北方向が東西方向よりも長く、地形的にみても東西棟であった可能性が高い。柱穴の直径は20cm～38cmで、柱根は残っていなかったが、柱痕の直径は13cm～16cmであった。検出面からの柱穴の深さは20cm～45cmで、南部がやや深い。なお、建物跡内北東部分に存在する柱穴P-4は、その位置から床束柱であった可能性はある。この柱穴の柱痕からは刀子鞘もしくは小柄（M2）が出土している。後述する溝や付近の柱穴から出土した遺物により、建物跡の時期は中世中頃であると思われる。

また、掘立柱建物跡の東側には建物と平行して延長3.1mで南北に並ぶ柱穴4個が存在しており、柱間も85cm～93cmとほぼ同じであることから、建物跡に関連する堀や柵が併設されていた可能性はある。

溝SD-1は幅40cm～1.1m、検出面からの深さ5cm～15cmで、総延長32mを検出した。溝の東端は南方向に折れ曲がり、地形の傾斜にあわせてほぼ自然消滅し、西端は調査区外にのびている。溝底のレベルはほぼ一定であるが、中央部がやや低い。溝埋土は10YR5/2 灰黄褐色のシルト質細砂で、埋土から土師器小片（2）と刀子と思われる鉄製品（M3）が出土している。溝SD-3は幅50cm程度、検出面からの深さ10cm前後の南側が低い南北溝で、SD-1とT字形に接続し、南端は調査区外にのびている。延長5.3mを検出した。埋土は10YR4/1.4 褐灰色細砂まじり極細砂である。SD-2もSB-1やSA-1、SD-3とほぼ並行方向で、SD-1とはT字形に接続している。溝幅は最大65cm、検出面からの最大深は10cmで、南端は幅が狭くなっており、調査区内で収束している。埋土は10YR4.5/1.4 褐灰色の細砂まじり極細砂で、土師器罏釜（3）が出土している。

これらの溝SD-2・3はSB-1やSA-1と並行方向であることからSD-1と接続して、SB-1に伴う溝である可能性があり、同時存在していた可能性が高い。ただし、建物跡から約7m、SA-1からは3.5m離れている。また、SD-1は建物跡を超えてさらに東側に続いている。

SD-2・3の東側にも柱穴や土壇が存在しているが、土壇SK-1は平面長楕円形で、上面での長さ1.6m、幅95cmで、検出面からの深さは46cmを測る。墓の可能性があり、埋土は上層が10YR5/2 灰黄褐色のシルト質細砂、下層が10YR6/2 灰黄褐色のシルト質細砂～極細砂である。

3. 出土遺物 (図版6、写真図版5～7)

清間遺跡から出土した遺物には土師器・須恵器・瓦質土器といった土器や陶器のほか、銅製品の錢貨・鞘や刀子・小刀・角釘などの鉄製品があり、石鏃などの石製品も認められた。

それらの大半は包含層からの出土であるが、(1)・(2)・(3)の土師器類や焼土塊、(M2)の銅製鞘や(M3)の鉄製刀子・小刀といった遺物が柱穴や溝から出土している。

(1) 遺構出土遺物

土器類

(1)は土師器の皿で、口径11.2cm、器高2.6cmを測る。SD-3のすぐ東側に存在するP-2の柱痕から出土した。本遺跡出土土器のうち最も残存状況が良好なものである。回転糸切りの平底から外上方に内湾ぎみにのび、端部は器高がやや厚くなって丸くおさめる。体部内外面はロクロナデで、内面底部には一方向の仕上げナデを施す。外面のロクロ目が顕著である。全体的に褐色を呈するが、焼成不良により黒色化したものか、黒色土器を意識したものか不明である。13世紀頃のものと思われる。

(2)はSD-1埋土から出土した土師器小片で、皿または碗であろう。推定口径は14.1cmで、残存高は1.9cmである。内外面はロクロナデであるが、内面の一部に縦方向のナデが認められる。

(3)は罌釜の口縁部破片で、推定口径は22.0cmである。罌の突出度は高く、断面は三角形を呈している。焼成良好な土師質で、橙色を呈しており、罌下には煤が付着している。14世紀後半頃のものであろうか。SD-2埋土出土。

なお、P-1の柱痕と掘形より、直径2cm～3cm程度のスサ入り焼土塊が6点程度出土している。

金属製品

(M2)はP-4の柱痕から出土した銅製品の鞘である。幅1.35cm、最大厚0.5cm、残存長3.9cmで、横断面の形状が刀形をしていることから、刀子などの小形刃物の鞘または小柄と判断できる。中空で、背部に銅板の貼り合わせ痕が認められる。鞘内には土のみが詰まっていた。現重量は4.2gを測る。

(M3)は鉄製の小刀か刀子と思われる。最大幅1.7cm、厚さ0.6cmで、茎部から刃部にかけての破片である。明瞭な関は認められない。SD-1の中央部で、SD-2・3の分岐点付近から出土したものである。他にも同一個体と思われる破片が多数あるが、接合はできなかった。

(2) 包含層出土遺物

土器・陶磁器類

(4)は須恵器蓋の口縁部片で、端部は下方に拡張し端部は凹面を呈している。推定口径は16.4cmで、外面は薄く灰を被っている。SB-1付近の包含層から出土した。9世紀頃のものと思われる。

(5)は須恵器蓋の口縁部片もしくは高坏脚端部であるが、推定径が14.9cmと大きいことから蓋であろう。端部は下方に小さく拡張し、細く鋭い。SB-1付近の包含層から出土した。

(6)は土師器小皿の破片で、口径6.3cm、器高1.1cmである。全体に歪みがあり、磨滅気味である。底部は回転糸切りで、調査区北西隅付近の包含層から出土した。鎌倉時代～室町時代のものであろう。

(7)も土師器小皿で口縁端部を欠失する。残存高は1.4cmである。回転糸切りと思われる底部と体部の境は丸みがある。調査区南半中央部の包含層から出土した。

(8)は瓦質土器の播鉢の破片である。SB-1付近の包含層から出土した。厚さ約1.5cmの体部から急に薄くなって口縁端部となり、丸くおさめる。内面の播目は3条以上を1単位としているが、原体

が篋か櫛かは不明である。外面は斜め方向のハケの後、ヘラミガキまたはユビナデを施している。ユビオサエ痕が顕著である。口径は推定30.2cmで、残存高は5.5cmを測る。所属時期の詳細は不明であるが、14世紀前後のものであろう。

(9)は施釉陶器碗の底部片で、唐津焼と思われる。底部径は4.7cmで、残存高は2.4cmである。北半部のSD-4付近の包含層から出土した。削り出し高台の底面は平滑になっており、使用によるものと思われる。高台部以外の内外面に施釉し、5Y 6/1の灰色を呈している。近世末以降のものであろう。

(10・11)は細連弁文の青磁碗の体部小片で、包含層から出土したものである。

金属製品

(M1)は調査区南半中央部の包含層から出土した銅銭である。一部欠失しているが、文字は篆書で「政和通寶」と読み、中国北宋の政和元年(1111年)に初鑄されたものである。直径は2.4cm、厚さは1.5mm、現重量は2.1gである。

(M4)も鉄製刀子と思われる身部の破片で、調査区西部の包含層から出土した。M3と同一個体の可能性がある。最大幅2.0cmで、残存長は3.2cmを測る。

(M5～7)は包含層から出土した鉄製角釘の破片である。M5・M7は調査区北半西部、M6は調査区南半中央部からそれぞれ出土した。

(M8)は鉄製鋤先かと思われるような破片である。調査区内南北境目の傾斜面包含層中から出土した。残存長6.9cm、最大幅6.95cmで、袋部で割れてしまっているようにも見える。厚さは0.95cmである。

(M9)は調査区南端中央部の包含層から出土した鉄製の手斧かと思われる破片である。残存長5.3cm、最大幅3.8cmで、横断面ではやや湾曲している。

(M10)は湾曲した厚さ0.7cmの不明鉄板である。3.35cm×3.55cmの平面円形に近い破片である。

石器・石製品

(S1)はサヌカイト製凹基無茎式石鏃である。両側縁はほぼ直線的に整形さる。基部の抉りは浅く、器長の1/5に達しない。両脚ともに端部を欠く。SD-4より出土した。

(S2)は砂岩と思われる細粒の岩石を用いた石製品である。釘頭状の頭部をもち、そこから扁平な楕円形状を呈する下部がのびる。下端は折れ面である。器種・機能ともに不明。

4. 小 結

以上のように、清間遺跡の本発掘調査の結果、中世中頃と思われる掘立柱建物跡や柱穴・溝・土壇を調査区南西部で集中的に検出した。ただし、検出した掘立柱建物跡(SB-1)は今回の調査ではその規模を明らかにすることができなかった。ただし、この建物跡や柱穴・溝は調査区の西側および南側に続いて存在している可能性が高く、その範囲が道路用地内にもおよぶことは明白である。

また、SB-1を囲むように存在している溝は、建物跡に伴うものとして捉えるのが自然であろう。

清間遺跡で検出した遺構の時期は、SD-4を除き、ほぼすべて14世紀後半頃の中世中頃と想定され、近接してSK-1のような墓が伴っている。なお、SD-4は層位的にも近世と想定される。

第2節 三木田池遺跡

1. 調査区の概要 (図版7・8、巻頭写真図版1～4・7、写真図版8・9)

三木田池遺跡の周知部分は大池南側の山裾であるが、池の堤の南西側部分で平成23年度に確認調査を実施した結果、柱穴を検出したと同時に土師器等の遺物も包含層から出土した。

本発掘調査区は大池の南北方向の堤南端から西側に下がった部分で、大池から流れ出る谷川に面した部分に位置しており、周知とされていた部分の西端から約30m西側で、約7.5m低い水田部分である。調査区平面形は、方位方向に沿った矩形を呈し、面積は700㎡である。調査区の大半が大池1筆分であるが、北東側に存在する一段高い水田も一部含んでいる。

調査の結果、北西隅で中世中頃と思われる掘立柱建物跡を検出した以外は、近世と推定される水田跡や溝を検出したにとどまる。しかし、遺物包含層からは縄文時代の石器・剥片が数十点出土した。

2. 調査区の土層と検出遺構

(1) 土層 (図版9、写真図版10下)

調査区西側での土層は、厚さ20cm前後の水田耕土の下面に厚さ5cm程度の薄い床土(第2層)と、厚さ12cm程度の厚い床土(第3層)の2層の床土があり、その下層にある第4層の2.5Y4.8/1の黄灰色粘質砂層と10YR6.2/2の灰黄褐色の砂礫層および第6層の2.5Y6/3にぶい黄色の極細粒砂～細粒砂が遺物包含層となっていた。この第4～6層は洪水砂層およびその可能性が高いと判断した土層で、中世の土器片とともに石器が混在した状態となっており、洪水によって石器がこの場所まで流されて砂とともに堆積したものと想定された。なお、洪水砂層の下層は第7層の10YR6/8の明黄褐色のシルト質極細粒砂で、この上面が遺構面となっていた。

(2) 遺構 (図版8・10、巻頭写真図版7、写真図版8～11)

本発掘調査の結果、調査区北西隅で中世と思われる掘立柱建物跡を検出した以外は、近世と推定される水田跡や溝を検出したにとどまる。しかし、遺物包含層からは縄文時代の石器が数十点出土した。

調査区は北東側の一部が一段高い現水田部分で、底面は南西側が低い傾斜面になっている。その他の部分はほぼ水平・平坦で、南西側にわずかに傾斜している。

検出した遺構は、調査区内北西隅部分で2間四方の掘立柱建物跡(SB-1)が1棟存在し、その周辺で柱穴を数基、東部中央で楕円形の土壇1基を検出したのみで、その他に溝や暗渠を検出したが、近世以降の水田に関係するものと判断された。ただし、遺物包含層中からは縄文時代の石器が30点以上出土した。

SB-1は2間四方で3.4m×3.8mと小規模な側柱建物跡で、南北柱間は1.55m～1.63m、東西方向では1.55mと2.05mで中央の柱穴が西側に偏っている。方位はN9.5°Wを示す。柱穴の直径は25cm前後、柱痕直径は13cm前後である。検出面からの柱穴の深さは12cm～18cmと浅いことから、上面が削られたと判断できよう。14世紀以降で16世紀後半までの間に建てられていた可能性が高い。

なお、調査中に大池の水抜きがおこなわれたため、石器の流入元を確認するため池汀線を分布調した結果、3地点(図版1)で十数点の石器・剥片を採集した。

3. 出土遺物

三木田池遺跡から出土した遺物には土師器・須恵器・瓦器・陶器・青磁といった土器や陶磁器のほか、鉄滓があり、縄文時代の石器として石鏃・石匙・削器・楔形石器などの打製石器のほか、磨石・敲石・凹石といった磨製石器がある。

土器や陶磁器・鉄滓はすべて包含層からの出土したもので、遺構からは遺物は出土しなかった。

石器については発掘調査区から出土したものが大半であるが、一部三木田大池において採集したものがある。これらは調査区出土のものと同じく縄文時代の所産によるもので、各器種が認められた。

縄文時代の石器には、石鏃・石匙・削器・楔形石器などの打製石器のほか、石皿と組み合わせて使用する磨石・敲石・凹石といった磨製石器がある。縄文時代の前期～後期に製作されたもので、後期に属するものが多いようであるが、現在のところ詳細な時期限定はできていない。

なお、石器はその多くが調査区北西部で出土しており、その他の部分では疎らであった。

(1) 包含層出土土器類・金属製品 (図版11、写真図版12)

土器・陶磁器類

(12) は須恵器坏Bの底部片で、高台径は9.0cm、残存高は2.7cmである。調査区南東部で機械掘削の際に出土した。内面底部の中央部分が使用のため平滑になっている。

(13) は須恵器の羽釜片で、推定口径は25.6cmである。残存高は8.7cmで、体部外面には斜め方向の平行タタキ目が認められる。内面はヨコナデであるが、同心円文の当て具痕が遺存している。口縁端部端面は凹面を呈しており、端部下1cmのところに鏝を貼り付けている。焼成は普通である。

(14) は瓦器碗の口縁部片で、調査区中央東半部分で灰色砂質土から出土したものである。口径12.0cmと推定され、残存高は2.6cmである。口縁部外面を強くナデることにより器厚を薄くしていることから和泉型である。外面にはユビオサエ痕が明瞭に残るが、器表が磨滅していることから、暗文は確認できない。なお、断面は黄色に近く、胎土の鉄分が酸化したためと思われる。

(15) も瓦器碗で、底部の破片である。断面三角形の高台を貼り付けており、高台径は5.0cmである。内面に暗文は認められないことから、鎌倉時代以降の時期が与えられよう。

(16) は土師器の皿で、口縁端部を欠失する。底径7.7cmで残存高は0.9cmである。底部外面は回転糸切りと思われる。

(17) は口縁部が外反する青磁碗の破片で、口径は15.4cmで、残存高は2.7cmである。外面には劃花文と思われる文様の一部が認められる。調査区南寄りの中央部から出土した。

(18) は細連弁文の青磁碗の体部小片で、包含層から出土したものである。

(19) は備前焼と思われ、小片のため挿目が認められないが挿鉢の可能性が高い。口縁端部は拡張しているが、薄く鋭い。推定口径は27.7cmで、残存高は4.5cmである。須恵器に近い灰色を呈している。調査区北西隅付近で出土した。

(20) は須恵器こね鉢の底部破片で、内面には使用による磨滅が認められる。回転糸切りの底部は径7.0cmで、調査区南寄りの中央部から出土した。

(21) は無釉陶器の甕底部破片で、底径は16.3cmと推定される。残存高は3.7cmで、底面はナデ、内外面はヨコナデ仕上げである。備前焼の可能性もある。調査区中央東部の灰色砂質土から出土した。

(22) は無釉陶器の挿鉢底部片で、9条1単位の櫛描による挿目を施しており、使用のため平滑になっ

ている。底径は12.9cmで、残存高は4.7cmである。外面には部分的に粘土を継ぎ足している。調査区南西部の灰色砂質土から出土した。

(23)は土師器(土師質)の炮烙の口縁部小片で、推定口径は25.6cm、残存高は3.9cmである。口縁部はやや内傾し、端部は内傾する丸みのある面となっている。内外面ともロクロナデと思われ、タタキ目は認められない。下端部には煤の付着が認められる。調査区中央南寄りの包含層から出土した。近世の所産と思われる。

金属製品

(M11)は椀形鉄滓で、径4.3cm程度、最大厚は1.5cmである。上面は平面に近いが、下面は整った椀形を呈していない。上面には木炭片が付着している。現在の重量は21.2gである。調査区北端の包含層から出土した。

(2) 包含層出土および三木田大池採集石器・石製品

(図版11~14、巻頭写真図版8、写真図版13~15)

調査区内および隣接する三木田大池で、多数の石器が出土・採集された。石鏃8点、削器・搔器9点、石匙2点、楔形石器およびその剥片9点、剥片4点、石核4点を図示する。

S3~S9は凹基無茎式石鏃である。S3は基部の挟りが浅く、脚両端が大きく外方へ開く。三木田大池第1地点表面採集。S4~S6は、基部の挟りが器長の1/3~1/4程度におよび、脚端部が丸みをおびるものである。両側縁は、やや膨らみをもつもの(S4)、緩やかな凹凸をもつもの(S5)、ほぼ直線的なもの(S6)が見られる。いずれも三木田大池第1地点表面採集。S7は基部の挟りが1/3程度におよぶ。側縁は直線的に整形され、脚端部は鋭く尖る。包含層より出土。S8は先端1/3程度を欠損するが、両側縁が丸みをおび、脚端部が尖る。包含層より出土。S9は基部をわずかに挟るものである。両側縁は直線的に整形されるが、先端部のみ側縁が屈折する。これが本来の形態であるか、再生加工の結果であるのか、いずれとも断じがたい。灰色砂質包含層出土。

S10は、平基無茎式石鏃の基部であろう。側面からの打撃で破損している。包含層出土。

S11~S16は削器である。S12を除いて、いずれも剥片の側縁に対し、片面から二次加工を施している。S12は、剥片の両側縁に、片面から細かな二次加工が施されており、両側縁が刃部として機能していた可能性がある。素材となった剥片は、特に定型化したものではないが、剥離軸方向に長い縦長傾向をもつ剥片を素材としたもの(S13~S16)が選択される傾向が窺える。また、素材剥片の一部に自然面をとどめるものが見られ(S11・S12・S15・S16)、その性状から、用いられた原石材は転礫であったと推定される。S11・S13は風化が進行している。S11・S12・S15・S16は包含層、S13は地山面上出土。S14は三木田大池第1地点表面採集。

S17~S19は搔器または削器である。S17は円礫の端部から剥離された剥片を素材とし、その打面付近に腹面側から二次加工を施しており、刃部の形態は円形搔器に近い。包含層出土。S18は厚みのある剥片の打面側側縁に、腹面側から二次加工を施して厚い刃部を作出する。素材剥片の背面末端側には、自然面をとどめる。灰色砂質包含層出土。S19は、横長剥片の末端側縁辺に、腹面側から二次加工を施したものである。刃部の形状と厚さからは、削器の可能性も捨象できない。包含層出土。

S20・S21は石匙である。S20は縦型の石匙で、背面側に自然面をとどめる縦長剥片を素材とする。二次加工は全周にわたって背腹両面から施される。機械掘削時の出土。S21は、横長剥片を素材とした横型の石匙である。素材剥片の末端側が刃部にあてられ、刃部の二次加工は腹面側から施されている。

つまみを含む図上部の縁辺の一部を折損する。灰色～にぶい黄白色の包含層出土。

S 22～S 27は楔形石器である。略四辺形ないしは不整多角形を呈し、多角形状となるS 27を含め、いずれも相対する二辺が打撃による潰れを示す。

S 28～S 30は、不規則な二次加工ないしは小剥離痕が認められる剥片で、二次加工のある剥片ないしは使用痕のある剥片に分類される。S 28は、打面が潰れた線状を呈しており、楔形石器の剥片の可能性があろう。いずれも包含層出土。

S 31～S 34は剥片である。いずれも自然面をとどめており、背面側と腹面側の剥離方向が一致するもの(S 32)、直交するもの(S 31)、対向するもの(S 33・S 34)など、多様な剥離形態が認められる。打面の性状も、平坦打面となるもの(S 31)、線状打面(S 32・S 34)、自然面打面(S 33)など多様である。S 32・S 34には、不規則な二次加工が認められる。

S 35～S 38は石核である。S 38は三木田大池第1地点表面採集。他は包含層出土である。S 35は、厚手の剥片を素材とし、その腹面を打面として素材の全周から剥離をおこなう。S 36も剥片素材の石核と考えられ、素材の相対する縁辺から剥離をおこなっている。S 37・S 38は礫素材の石核である。S 37は円礫の一端から、チョッピングツール状に剥離をおこなう。また、S 38は亜円礫の縁辺からの剥離見られるが、剥離面自体が表裏同時割れを示したり、明確に打点のない不規則な「ハジケ」状を呈したりすることから、偽石器の可能性はある。

S 39は叩石である。図下部が厚みを増した円礫を用い、端部には打撃痕が観察される。

S 40・S 41は磨石である。扁平な円礫を用い、その片面には磨痕が認められる。また、S 41の図左面中央には、打撃痕と思われる重複したくぼみが見られる。

第2表 清間遺跡・三木田池遺跡出土・三木田大池採集石器一覧表

番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
S 1	石鏃	14.8	12.9	3.1	0.6	サスカイト	S 15	削器	47.4	31.2	5.8	11.8	サスカイト	S 29	加工痕剥片	29.9	26.9	7.5	4.3	サスカイト
S 2	石製品	24.1	20.3	7.0	3.8	砂岩	S 16	削器	63.0	30.6	6.2	12.9	サスカイト	S 30	加工痕剥片	28.0	34.6	4.0	4.2	サスカイト
S 3	石鏃	10.8	13.0	2.6	0.4	サスカイト	S 17	掻器・削器	44.8	42.7	9.0	19.8	サスカイト	S 31	剥片	40.2	16.8	6.3	3.9	頁岩?
S 4	石鏃	19.5	11.8	2.9	0.6	サスカイト	S 18	掻器・削器	97.2	36.3	9.6	37.3	サスカイト	S 32	剥片	48.5	29.3	6.6	10.6	サスカイト
S 5	石鏃	17.5	10.8	3.0	0.4	サスカイト	S 19	掻器・削器	59.9	36.1	7.0	21.8	サスカイト	S 33	剥片	45.0	27.5	12.0	11.2	サスカイト
S 6	石鏃	22.6	16.1	3.3	0.8	サスカイト	S 20	石匙	63.6	18.7	6.0	8.1	サスカイト	S 34	剥片	43.5	26.6	5.0	38.1	サスカイト
S 7	石鏃	17.1	12.2	4.0	0.5	サスカイト	S 21	石匙	53.2	86.1	9.7	49.0	サスカイト	S 35	石核	54.5	47.3	12.9	35.2	サスカイト
S 8	石鏃	18.8	21.7	2.4	1.0	サスカイト	S 22	楔形石器	23.1	24.2	7.3	4.2	サスカイト	S 36	石核	57.0	23.6	9.8	12.0	サスカイト
S 9	石鏃	27.5	17.4	3.5	1.4	サスカイト	S 23	楔形石器	29.2	24.1	9.0	8.3	サスカイト	S 37	石核	49.0	47.0	19.1	50.1	サスカイト
S 10	石鏃	22.3	18.8	4.9	2.2	サスカイト	S 24	楔形石器	33.4	41.6	7.8	10.5	サスカイト	S 38	石核	27.3	44.0	17.9	25.3	不明
S 11	削器	34.9	26.9	6.7	5.9	サスカイト	S 25	楔形石器	36.9	22.4	8.0	8.9	サスカイト	S 39	叩石	68.2	43.9	31.9	134.9	不明
S 12	削器	35.6	28.9	4.0	6.5	サスカイト	S 26	楔形石器	40.0	33.4	13.6	16.9	サスカイト	S 40	磨石	110.6	86.9	43.5	539.8	凝灰質砂岩
S 13	削器	48.6	30.8	6.0	7.9	サスカイト	S 27	楔形石器	63.8	41.5	10.0	32.5	サスカイト	S 41	磨石	102.3	90.8	39.7	564.5	流紋岩
S 14	削器	53.0	23.1	5.6	6.7	サスカイト	S 28	加工痕剥片	29.6	16.1	6.0	2.9	サスカイト							

4. 小 結

以上のように、三木田池遺跡の本発掘調査の結果、調査区北西隅部分に限定して小規模な掘立柱建物跡1棟を検出した。時期は中世と推定しており、ほかに同時期と推定される柱穴・溝・土壌を検出した。

また、三木田遺跡では洪水砂が20～30cmの厚さで堆積しており、その砂中には多数の縄文時代石器が中世末の土器片とともに含まれていた。この洪水砂は14～16世紀の間に起こった洪水により堆積したものと推定されるが、本発掘調査区が三木田大池から流れ出る小河川のすぐ南側に位置していることから、調査区の上流側にあたる現三木田大池付近に縄文時代の集落跡が存在し、そこから洪水によって流出して堆積したと想定される。なお、三木田大池畔において、3か所の地点で縄文時代の石器を多数採集した。そのうち、第1地点とした、南西方向にのびる小尾根の先端にあたる位置で石器を多数採集した。あるいは、その一帯に縄文時代集落が存在しており、洪水の際にそこから流出して調査区の一帯に堆積したものかもしれない。

第3章 総括

第1節 清間遺跡

清間遺跡の今回調査した部分は、北西から派生して南東方向にのびる幅数十mの細い尾根の南側斜面である。これまで周知されていた弥生散布地の清間遺跡は、今回調査区からさらに南に下がった標高50m前後の台地南東端にあたり、この部分も道路予定地に含まれていたが、確認調査を実施した結果、削平により遺構や顕著な遺物は発見されなかった。この部分は南側に開析する主谷の中心部を南流する安田川（巽川）が東方向から南東方向に流れを変える部分の東側にあたり、遺跡の東側は大きな崖となつて三木田大池となっている。近隣の遺跡には南側の三木田池遺跡・西側の西の下遺跡という弥生散布地が存在しているが、その他には中世散布地の新池遺跡や弥生集落跡の中津原遺跡などが認められるものの、1km以上離れており、遺跡が集中している場所とはいえない地域である。

今回の調査区は、東西に長く上下に分かれた水田2筆部分であり、この水田のほぼ中央部が道路用地となっていたが、道路工事の際に道路東側の同一水田の田面も切り下げる予定であったため、この部分も含めて本調査を実施した。調査区は東西42m、南北18mの歪んだ矩形を呈し、面積は559㎡である。

本発掘調査の結果、掘立柱建物跡1棟のほか調査区のほぼ全域にわたって溝や柱穴等を検出したが、掘立柱建物跡や多数の柱穴と土壌などは下段水田にあたる調査区南西部に集中した状態であった。この部分で検出した掘立柱建物跡のSB-1は、南北2間(6.0m)以上、東西2間(6.0m)以上の総柱建物跡で、今回の調査では全体規模を明らかにすることができなかった。SB-1の東側には建物跡と並行方向に柱列が存在しており、建物跡に伴う塀または柵列(SA-1)と推定した。この柱列と建物跡との間隔は3.0mである。また、SB-1の北側には溝SD-1が、東側にはSD-3とSD-2の2条の溝がそれぞれSD-1に直角につながるかたちで存在しており、いずれもSB-1と並行方向であることからこの建物跡に伴う可能性が高いと判断できた。ただし、SD-1はSD-2・3との接続部を超えて東方に長くのびており、SD-2はSB-1から約8m、SA-1とは約5m離れており、SD-3もSB-1から約7m、SA-1とは約4m離れている。これらの点はSB-1に伴う溝ではない可能性も捨てきれない。

これらの遺構のうち、SB-1の西側と南側、SD-1の西側、SD-3の南側はいずれも調査区外に遺構が続いていることがほぼ確実であった。調査区の西側については道路用地外であるが、調査区南側については道路予定地内であったものの、追加の確認調査や調査区を拡張して調査を実施する許可が与えられず、未調査で終わらざるを得なかった。

SB-1の東方12mの位置で検出した土壌SK-1は、その規模と形状から土壌墓といった機能が推定でき、建物跡と同時期中世中頃と考えられる。

調査区内上段で検出した遺構には溝1条(SD-4)とわずかな柱穴があるが、SD-4の時期については検出面や埋土の状況および付近から出土した遺物により、近世の可能性が高いと判断している。

調査の結果、出土した遺物には土師器・須恵器・瓦質土器や陶器のほか、銅製品の銭貨・鞘または小柄や鉄製品の刀子・小刀・角釘などがあり、石鏃なども認められた。それらの大半は包含層から出土したものであるが、一部は柱穴や溝から出土した。

第2節 三木田池遺跡

弥生散布地である三木田池遺跡のこれまでの周知部分は三木田大池南西隅部分の大池に面した山裾であるが、今回の本発掘調査区は三木田大池の堤の南端から西側に約7m下った水田部分で、三木田大池の洪水吐から続く谷川に面した南側に位置している。調査区平面形は、方位方向に沿った矩形を呈し、面積は700㎡である。大半が水田1筆分であるが、北東側に存在する一段高い水田も一部含んでいる。

本発掘調査の結果、調査区北西隅で中世中頃と思われる2間四方の掘立柱建物跡を検出し、その周辺で柱穴を数基、東部中央で楕円形の土壌1基が存在した程度である。その他に溝や暗渠を検出したが、近世以降の水田に関係するものと判断された。ただし、遺物包含層中からは縄文時代の石器が30点以上出土した。この遺物包含層は20cm～30cmの厚さがあり、黄灰色を呈するやや粗い砂層および、にぶい黄色の細かい砂層で、20cm～30cmの厚さで堆積しており、中世末の土器片とともに石器が混在した状態になっており、洪水によって石器がこの場所まで流されて砂とともに堆積したものと想定された。

掘立柱建物跡は3.4m×3.8mの小規模な側柱建物跡で、建物の方向は方位方向に近い。時期は特定できないが、建物跡の表面を覆っていた洪水砂層には16世紀後半（安土桃山時代）以前の中世の土器片が含まれていたことと、柱穴の埋土中に14世紀頃の土器片が含まれていたことから、14世紀以降で16世紀後半の間に建てられていた可能性が高い。

縄文時代の石器には、石鏃・石匙・削器・楔形石器などの打製石器のほか、石皿と組み合わせて使用する磨石・敲石・凹石といった磨製石器がある。縄文時代の前期～後期に製作されたもので、後期に属するものが多いようであるが、現在のところ詳細な時期限定はできていない。

石器および土器を包含していた洪水砂は、14～16世紀の間に起こった洪水により堆積したものと推定されるが、本発掘調査区が三木田大池から流れ出る小河川のすぐ南側に位置していることから、調査区の上流側にあたる現三木田大池付近に縄文時代の集落跡が存在し、そこから洪水によって流出して土砂とともに堆積したと想定される。

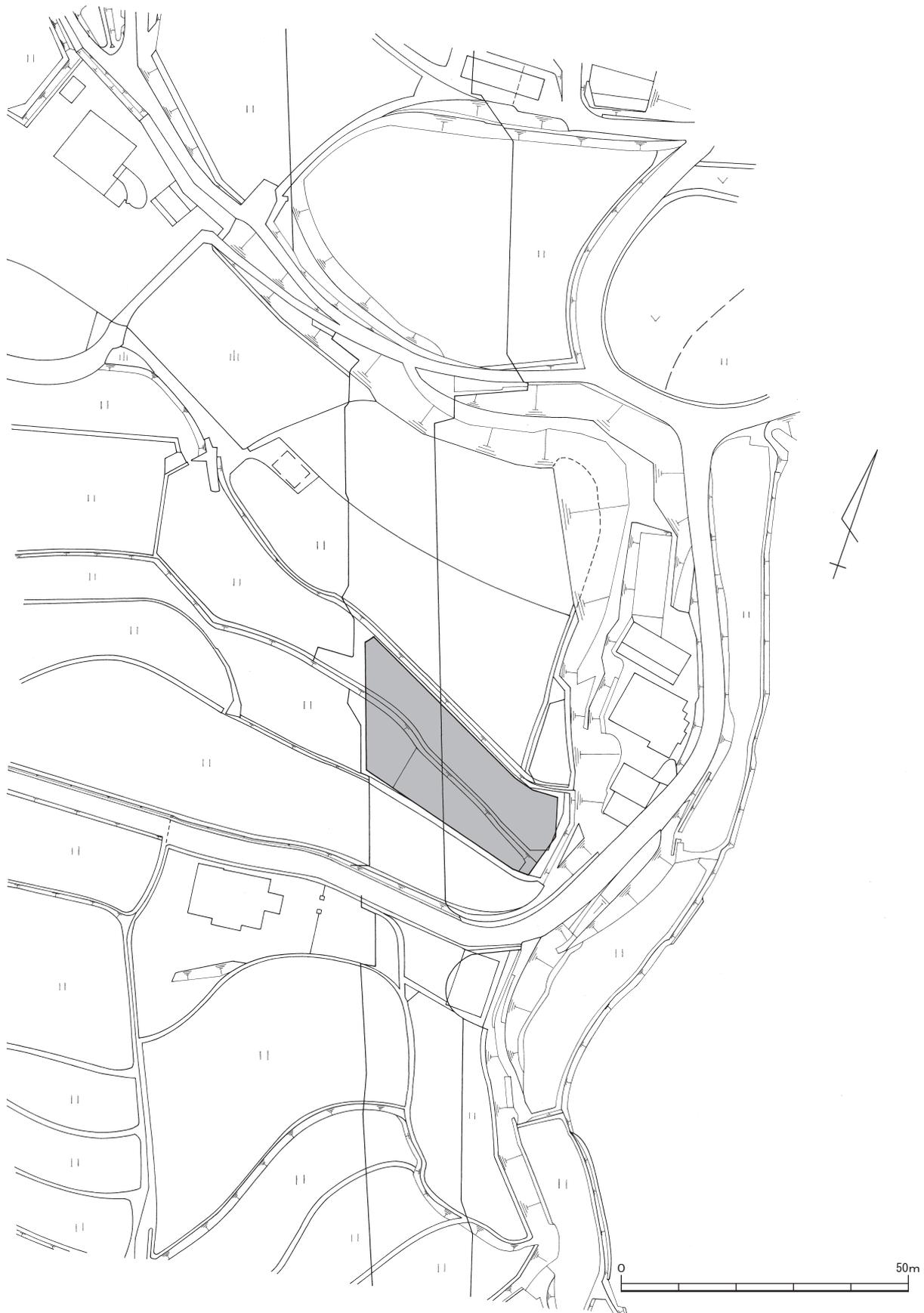
三木田池遺跡の調査を実施している時点で、三木田大池の水が抜かれていたため、縄文時代の集落跡の場所を推定すべく、大池の汀線付近の踏査を実施した。三木田大池の水は北側・東側・南東側の谷から流入しているが、最も大きく深い谷は北側のもので、延長1km以上におよぶ。東側の谷は深くはないが、250m以上の幅広いものである。

踏査の結果、汀線付近の3箇所（図版1）で石器8点・剥片13点の合計21点を採集した。北側の第1地点（採集地点1）と仮称した部分（写真図版11⑦・⑧）は、北側と東側の谷が接する部分で、ちょうど北東から舌状にのびた尾根の先端にあたる。尾根先端の水田下側部分で、長さ約80mにわたって石器・剥片が散布していた。この地点では17点と最も多数を採集したが、この地点が集落本体の中心に一番近い部分と想定できた。それは、採集地点のすぐ上の水田部分から道路を超えた丘陵端部にまで及ぶと想定している。第2地点（採集地点2）は大池南東部の谷出口付近で、1点の石器を採集した。第3地点（採集地点3）は第2地点の50m程度西側で、大池の南汀線部分である。かつての周知部分とは60m程度の距離を置いている。3点の剥片を採集した。なお、かつての周知部分の汀線付近は滞水のため踏査することができなかった。

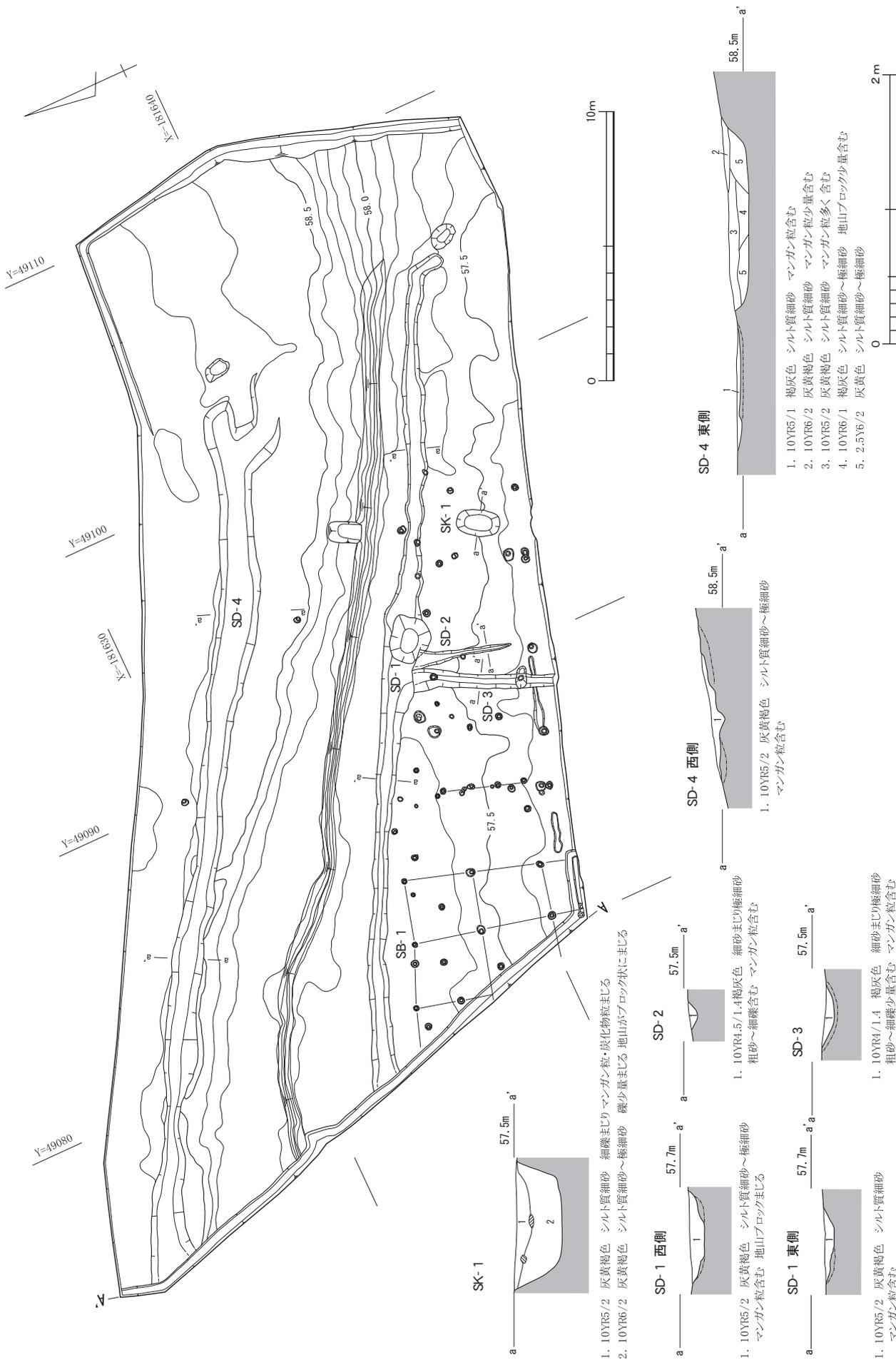
第2・3地点では採集点数も少ないが、かつての周知部分や第1～第3地点も含めた範囲内が縄文時代の集落跡で、第1地点の北東側を中心部分としてとらえるほうがよいと思われる。



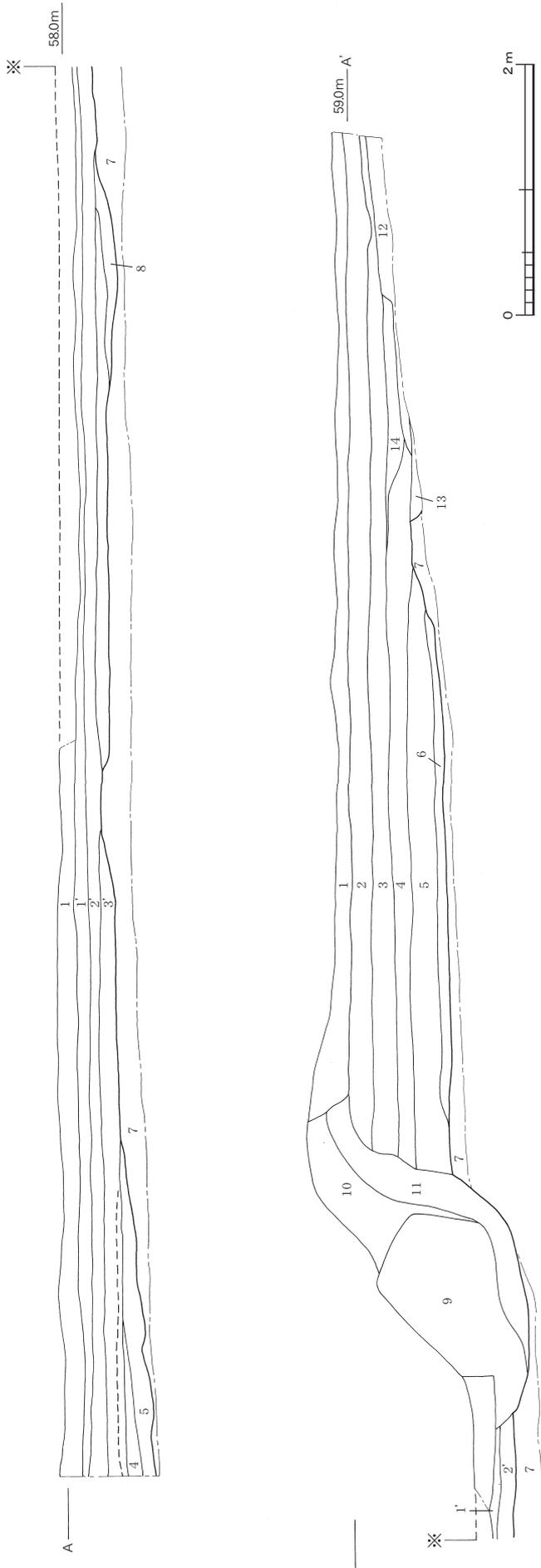
清間遺跡・三木田池遺跡の位置



清間遺跡 調査区の位置

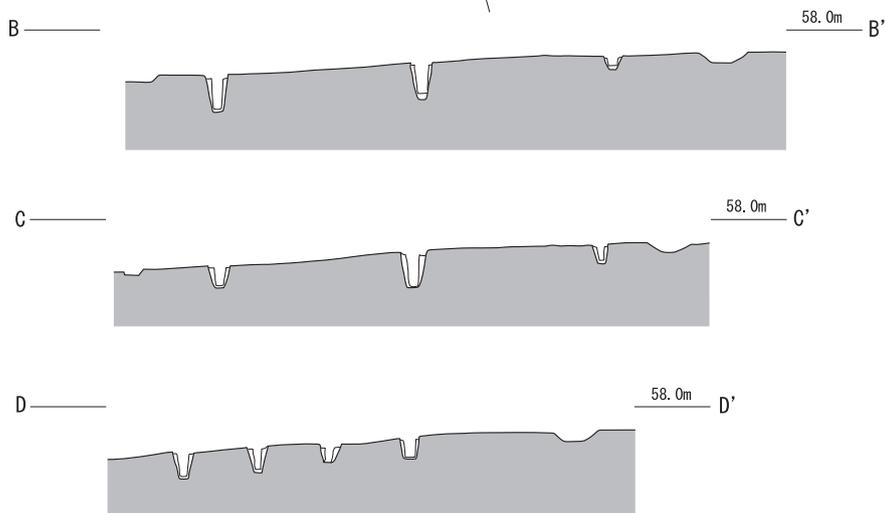
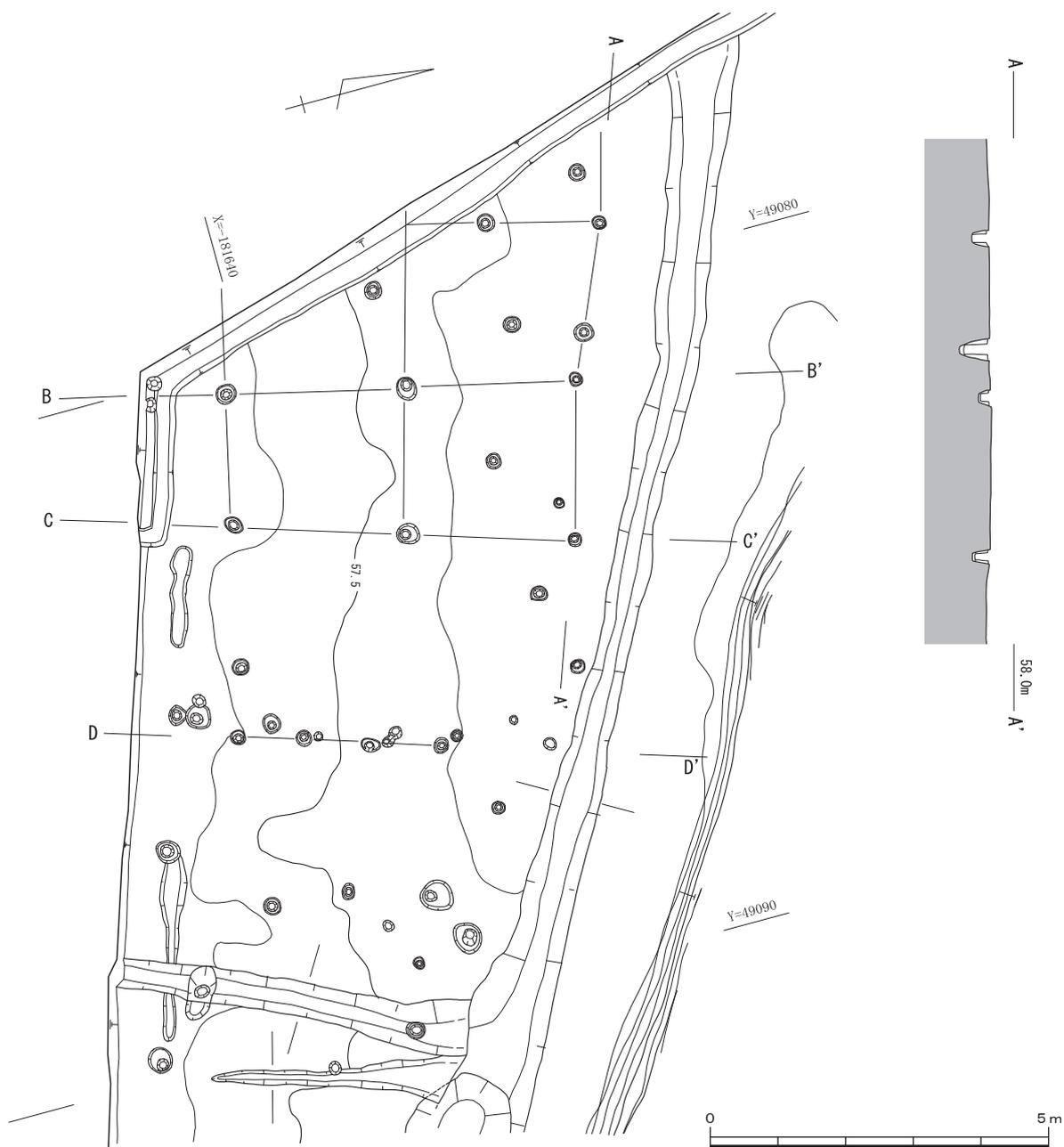


清間遺跡 調査区平面・遺構埋土層断面図

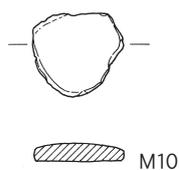
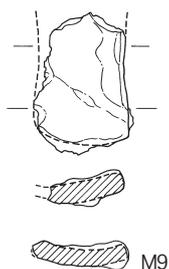
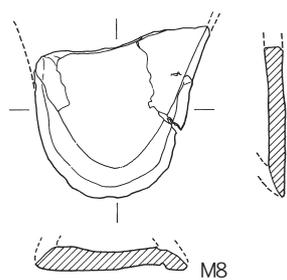
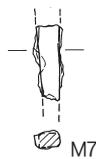
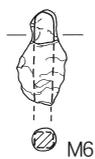
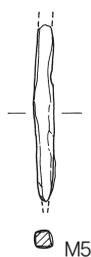
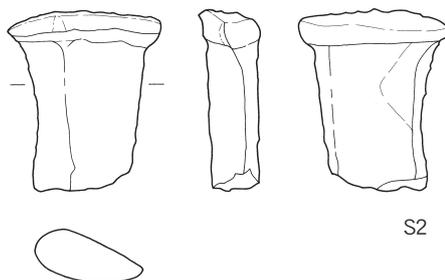
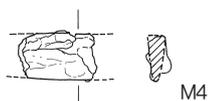
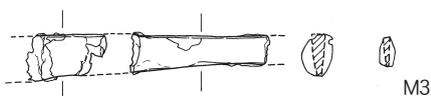
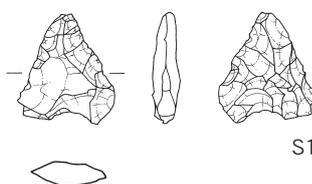
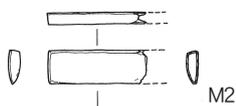
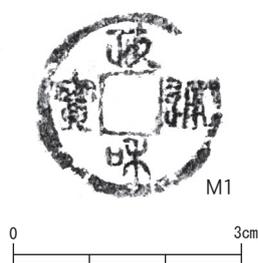
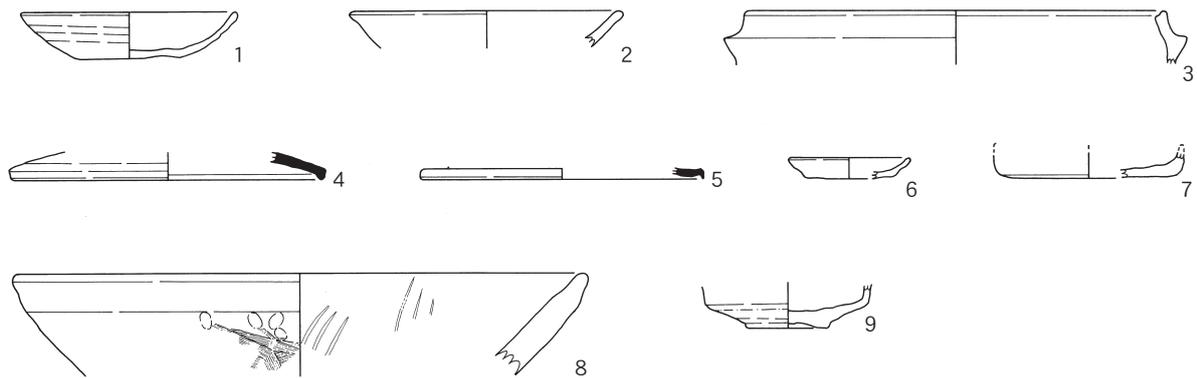


- | | |
|--|---|
| <p>1. 耕土 2.5Y3.6/1 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量含む</p> <p>1' 耕土 5Y4.5/1 灰色 細粒砂で極細粒砂・粗粒砂～細礫少量含む</p> <p>2. 旧耕土 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂で細粒砂多く含む 中粒砂～細礫含む</p> <p>マンガン含む 鉄分沈着層 2 条あり</p> <p>2' 2 層と同色・同質で鉄分沈着層が下部のみ</p> <p>3. 旧耕土 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量含む</p> <p>マンガン含む 鉄分沈着層 1 条あり</p> <p>3' 3 層と同色・同質で鉄分沈着層が下部のみ 南端で顕著</p> <p>4. 包合層 10YR3.8/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量 上部にマンガン沈着 やや砂質</p> <p>5. 包合層 10YR4.5/2 灰黄褐色 極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～φ 2 cm 大の中礫を微量含む マンガン含む</p> | <p>6. 10YR4.5/2.4 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂～粗粒砂少量含む やや粘質 マンガン含む</p> <p>地山の影響で 5 層が土壌化した部分と思われる</p> <p>7. 地山 9YR6/7 明黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂微量含む 粘質 上部にマンガン沈着</p> <p>8. 溝 (SD-1) 埋土</p> <p>9. 間知ブロックおよび裏込めの砕石</p> <p>10. 10YR4.5/2 灰黄褐色 畔上面の覆土</p> <p>11. 裏込め土 1～7 層のブロックが混在</p> <p>12. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂で中粒砂～粗粒砂少量含む やや粘質 土壌状おちこみ埋土</p> <p>13. 7.5YR3.6/2 灰褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂～粗粒砂少量含む 灰化物含む 粘質 土壌状おちこみ埋土</p> <p>14. 溝 (SD-4) 埋土</p> |
|--|---|

清間遺跡 調査区西側壁土層断面図



清間遺跡 SB-1 平面・断面図

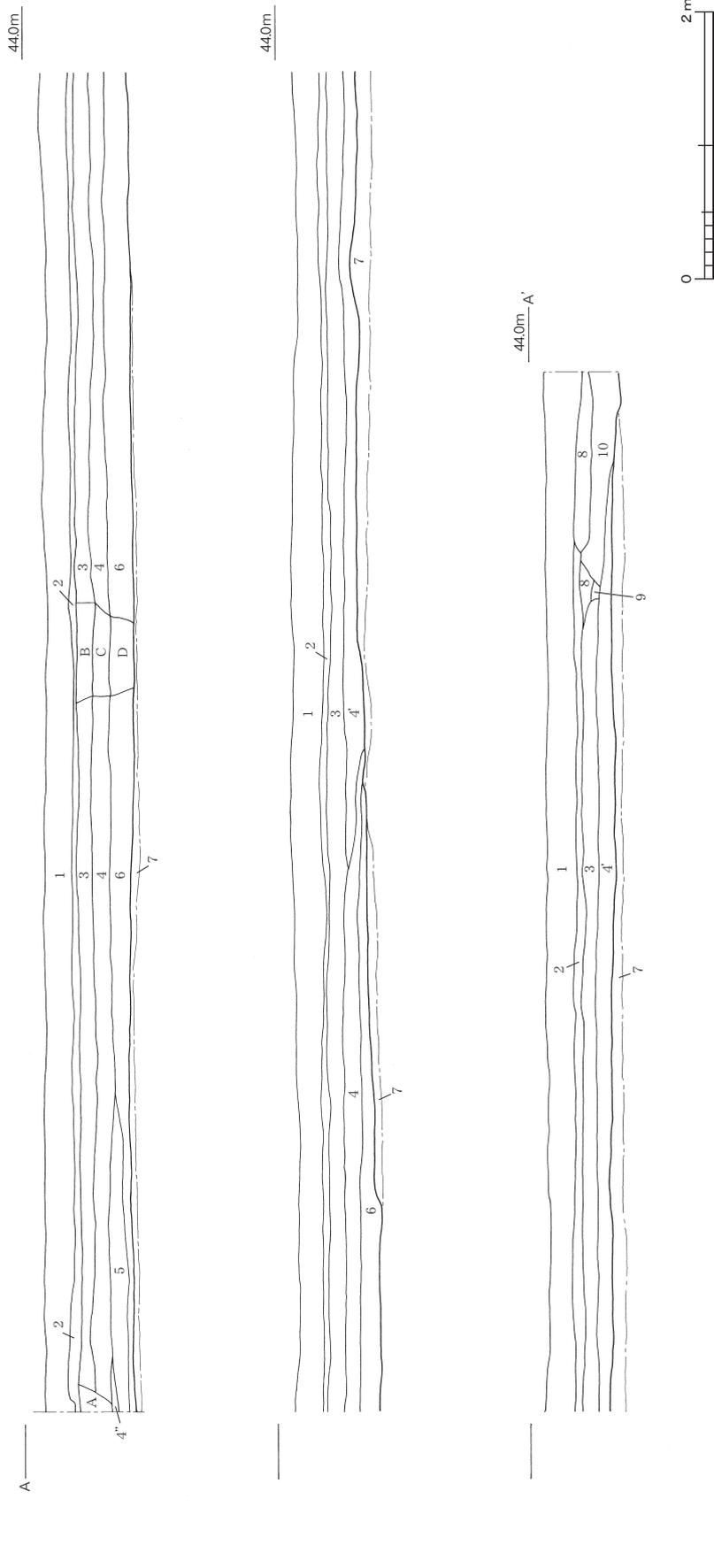




三木田池遺跡 調査区の位置

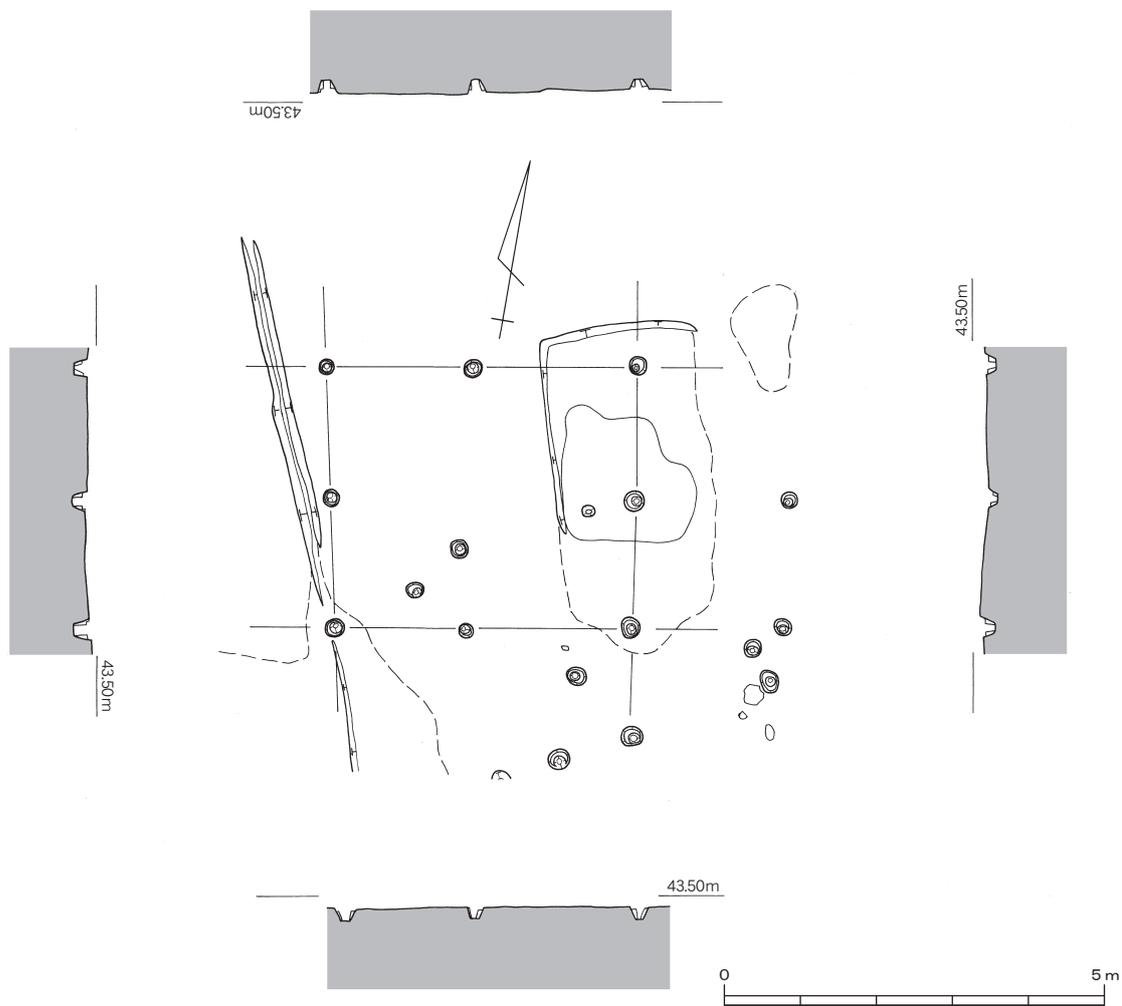


三木田池遺跡 調査区平面図

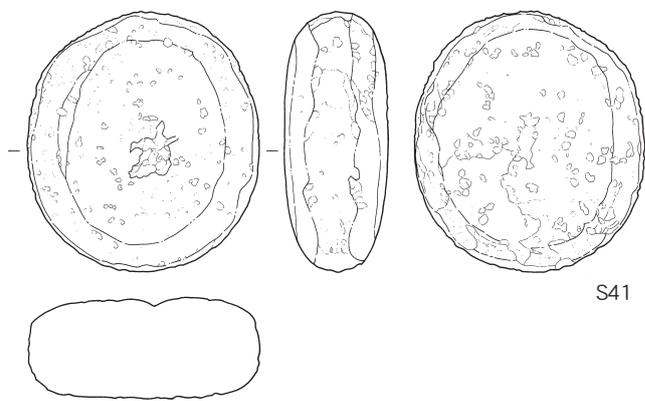
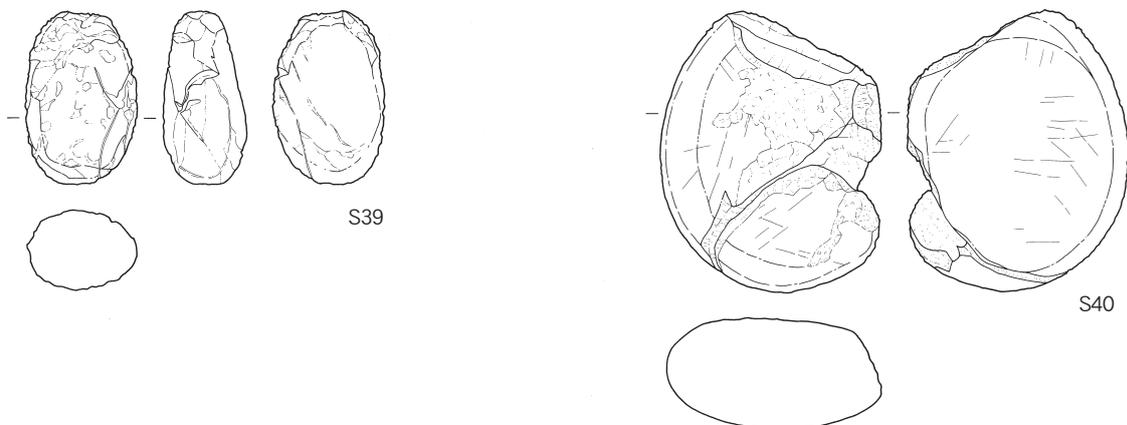
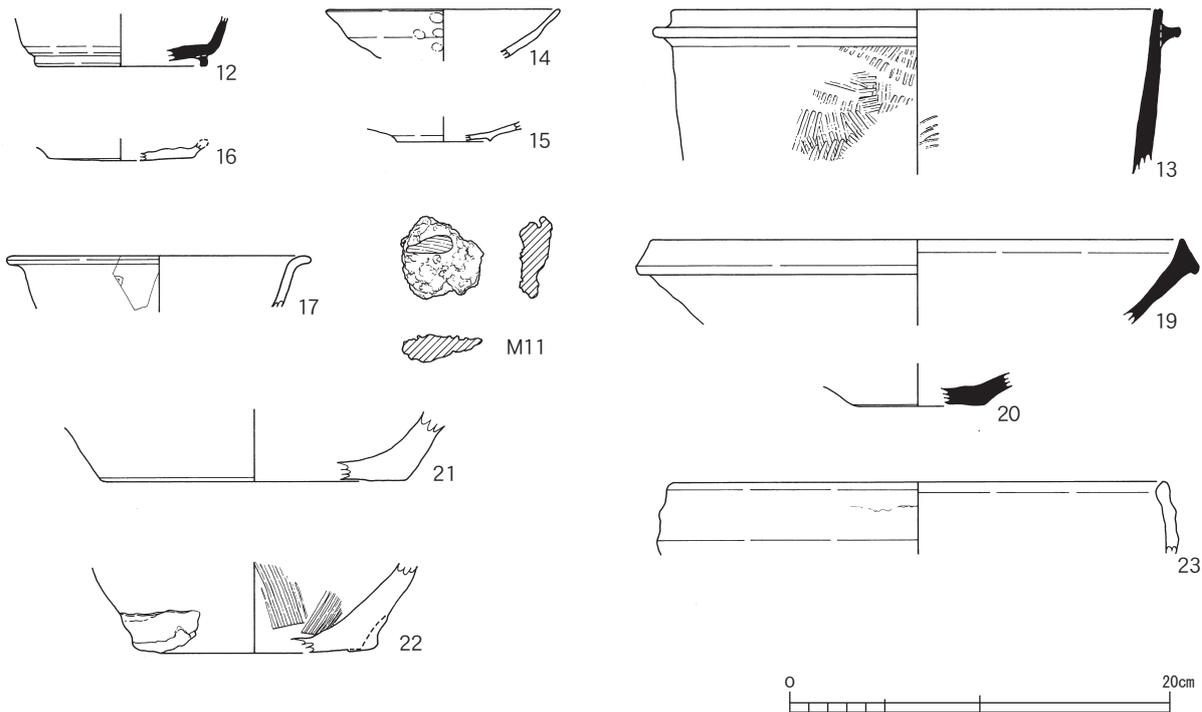


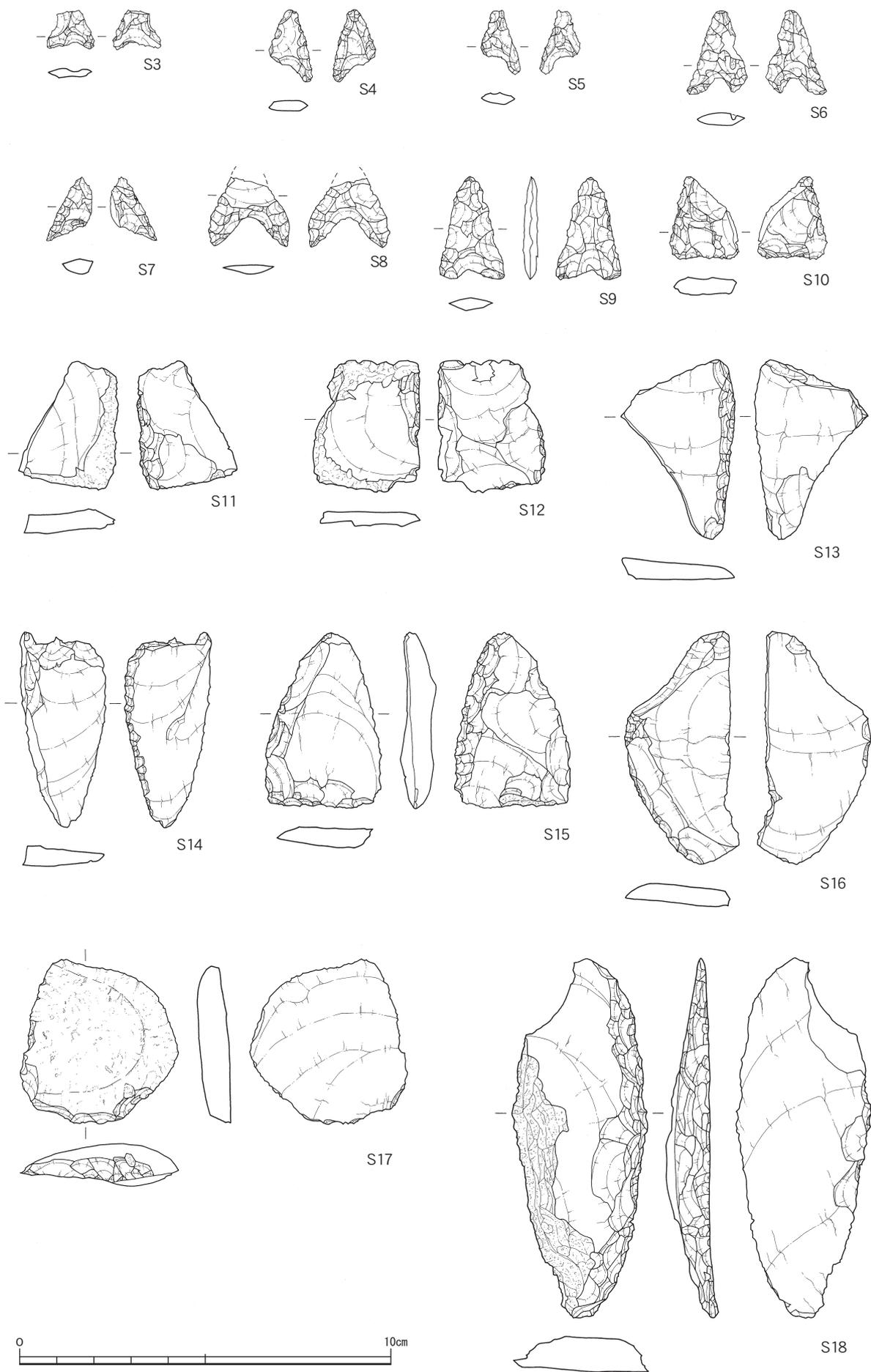
1. 耕土 2.5Y2.4/1 黒色 シルト質極細粒砂で細粒砂～細礫多く含む
 2. 床土 I 2.5Y4.5/1 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
 3. 床土 II 10YR6/6 明黄褐色中心 細粒砂で粗粒砂～φ 1 cm大の中礫 (花崗岩風化礫) 非常に多く含む
 4. 包含層 2.5Y4.8/1 黄灰色 シルト～極細粒砂で細礫少量含む 粘質砂層に近い 鉄分・マンガン含む 洪水砂層
 - 4' 10YR5.2/2 灰黄褐色 砂礫層 細粒砂～細礫 淘汰悪い 洪水砂層
 - 4'' 5Y5/1 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂 粘質砂層 鉄分・マンガン含む 洪水砂層
 5. 2.5Y5/1.6 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で中粒砂多く含む 粗粒砂少量含む 中央上部に鉄分集積 マンガン含む
 6. 包含層 2.5Y6/3 にぶい黄色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む 鉄分・マンガン含む 洪水砂層の可能性が非常に高い
 7. 地山 10YR6/8 明黄褐色 細粒砂まじりシルト質極細粒砂 粘質 鉄分・マンガン含む
 8. 2.5Y5.6/3.5 にぶい黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で細礫少量含む
 9. 10YR5.4/3.5 にぶい黄褐色 粗粒シルトで中粒砂～細礫多く含む
 10. 砂礫層 2.5Y5/1.7 暗灰黄色 中粒砂～細粒砂でφ 4 cm大の中角礫～φ 25cm大の巨角礫を含む 淘汰悪い
- A. 2.5Y4.4/1 黄灰色 砂礫層 中粒砂～φ 1 cm大の中礫 淘汰悪い 暗葉
 B. 暗葉埋土 3層と同じになるように埋めた土
 C. 暗葉埋土 3層と同じになるように埋めた土
 D. 暗葉石組および礫間隙の流入土

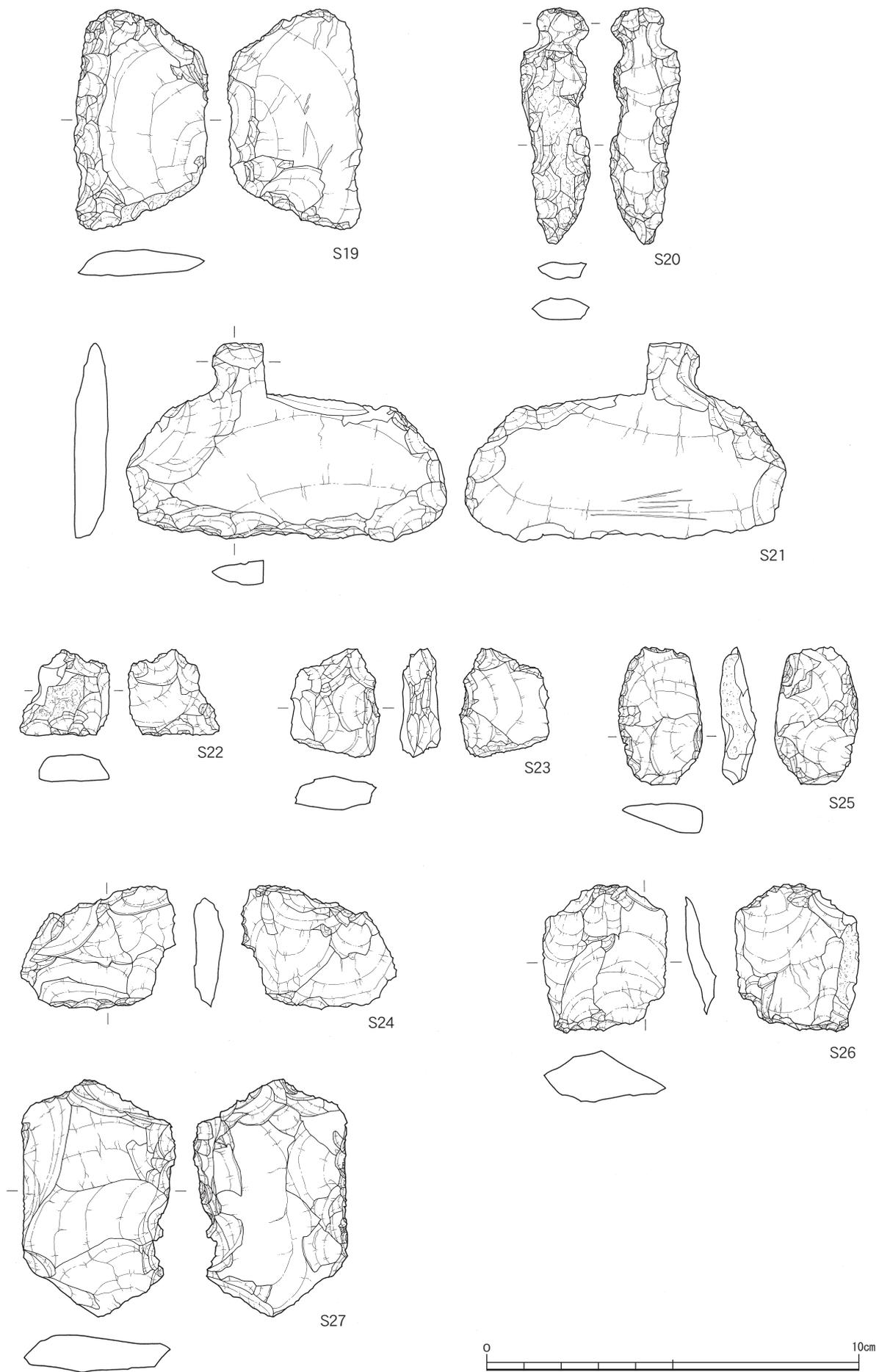
三木田池遺跡 調査区西側壁土層断面図



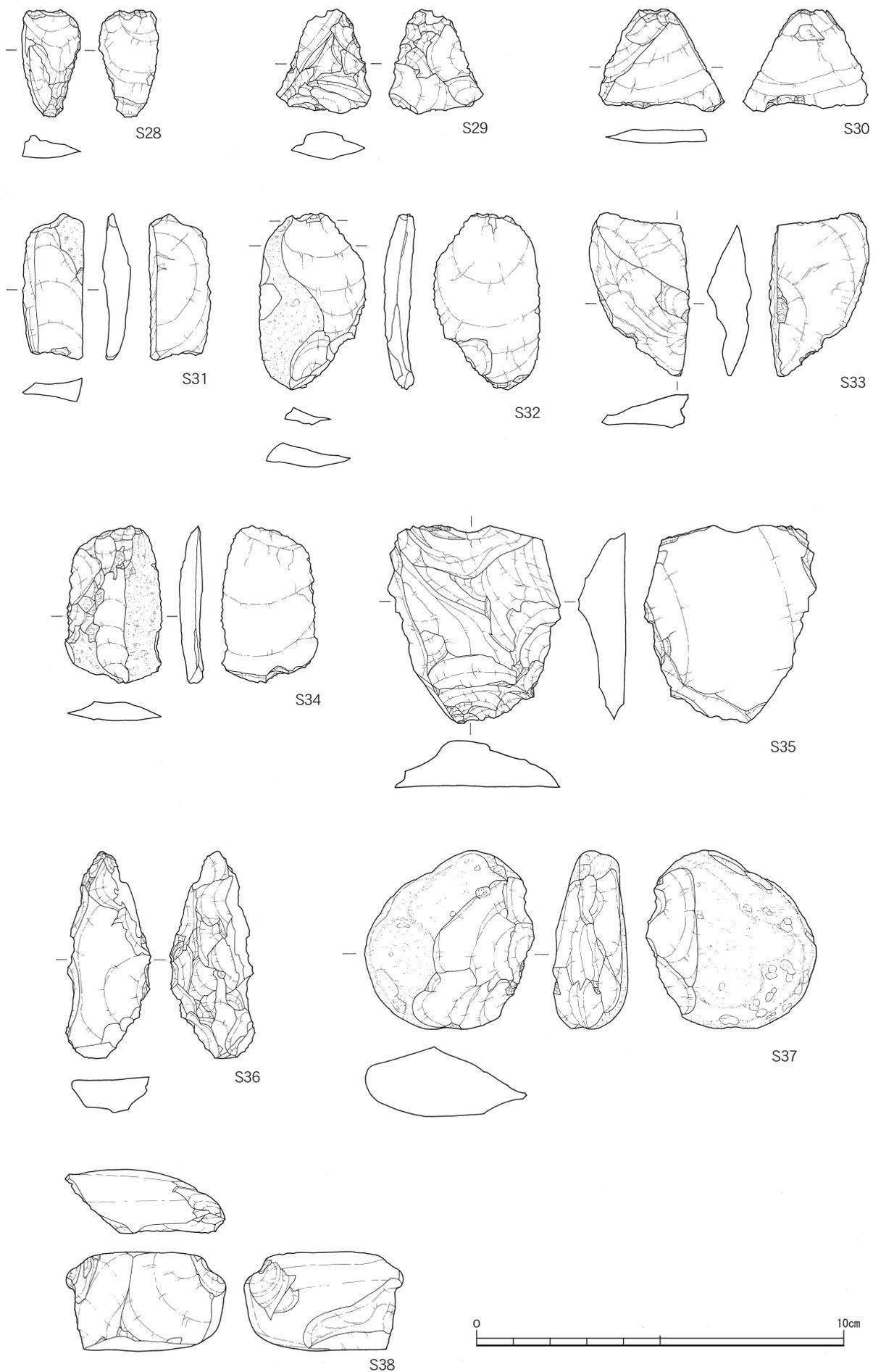
三木田池遺跡 SB-1 平面・断面図







三木田池遺跡出土・三木田大池採集 石器(2)





清間遺跡 調査区全景（北上空から）



清間遺跡 調査区全景（西上空から）



清間遺跡 調査区西半部（南東から）



清間遺跡 調査区全景（北西から）



清間遺跡 調査区全景（南東から）



清間遺跡 遺構集中部（南から）



①清間遺跡 SK-1 埋土土層断面 (南西から)



②清間遺跡 SK-1 完掘後全景 (南東から)



③清間遺跡 SD-1 東部埋土土層断面 (南東から)



④清間遺跡 SD-1 西部埋土土層断面 (南東から)



⑤清間遺跡 SD-2 埋土土層断面 (南から)



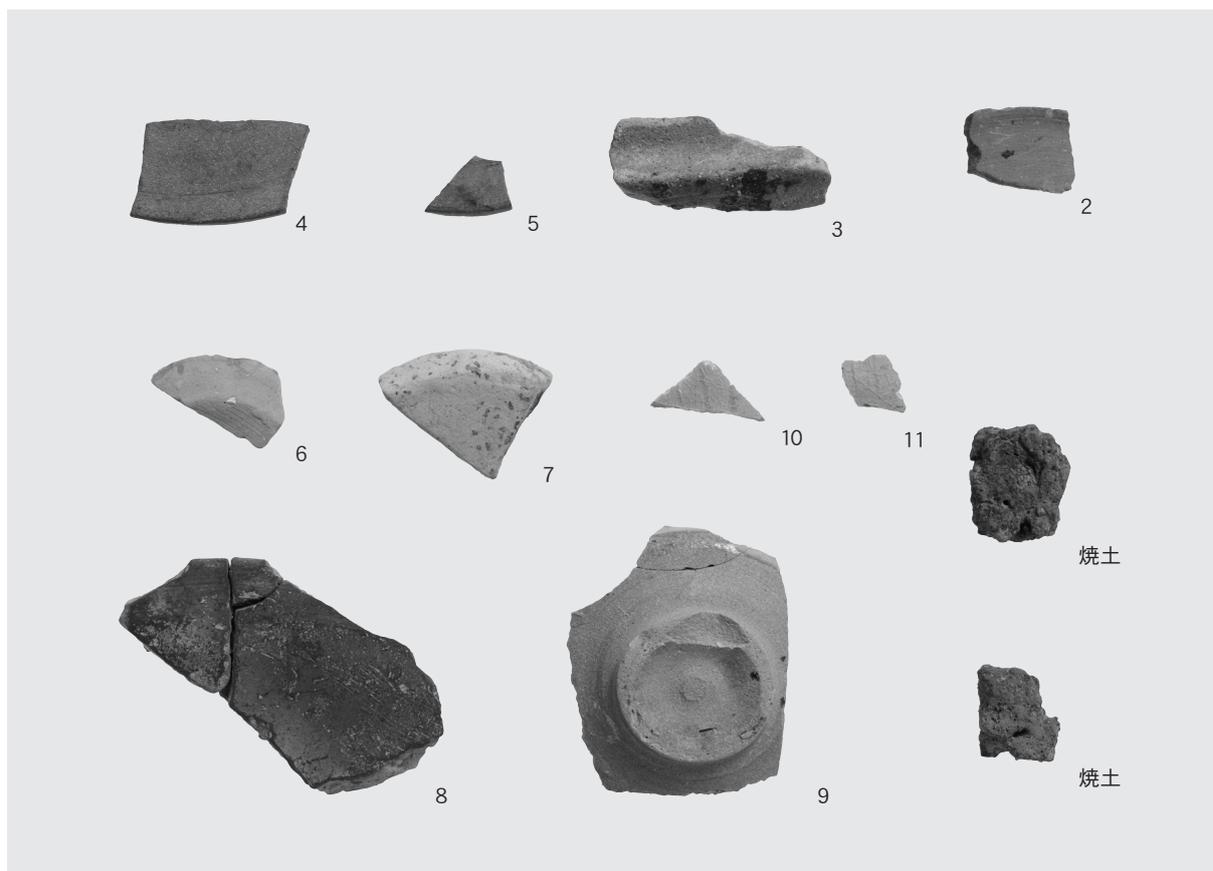
⑥清間遺跡 SD-3 埋土土層断面 (南西から)



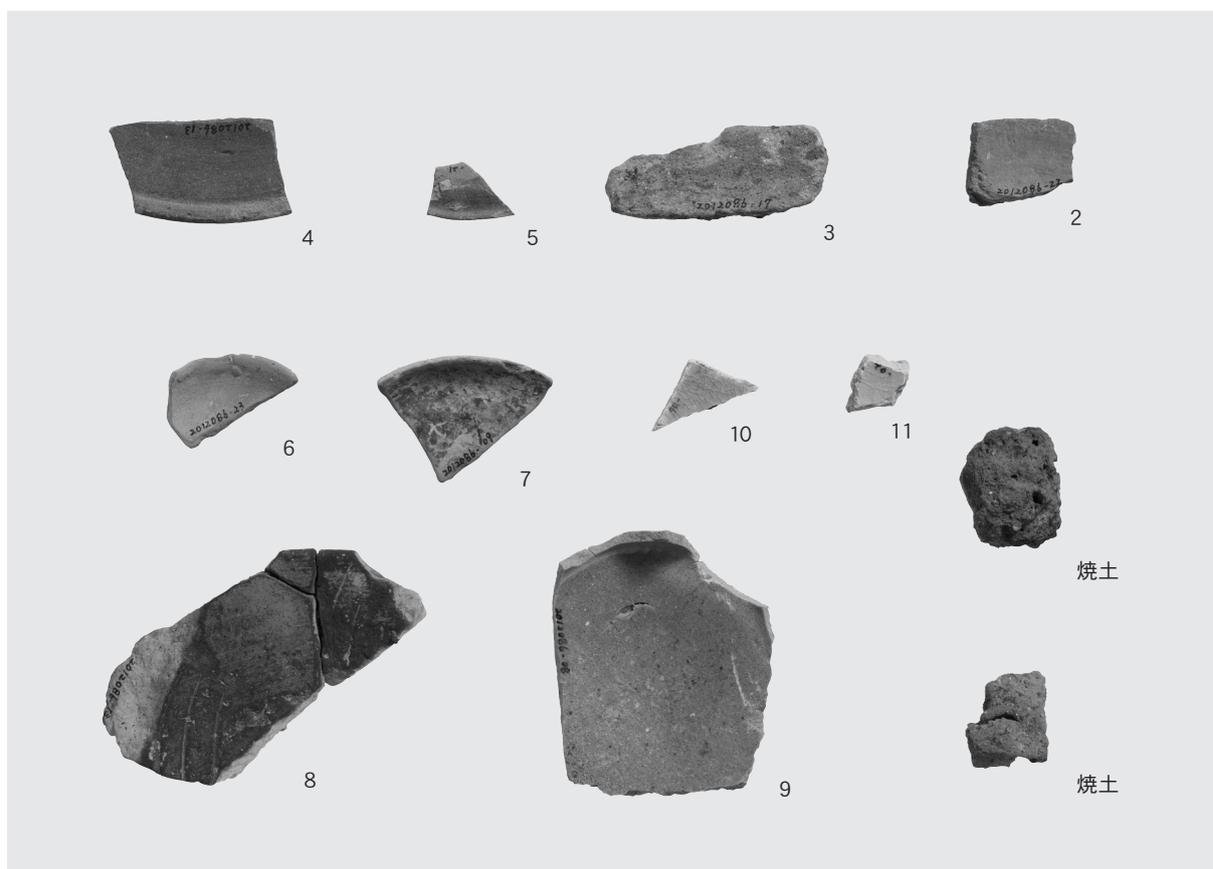
⑦清間遺跡 SD-4 東部埋土土層断面 (南東から)



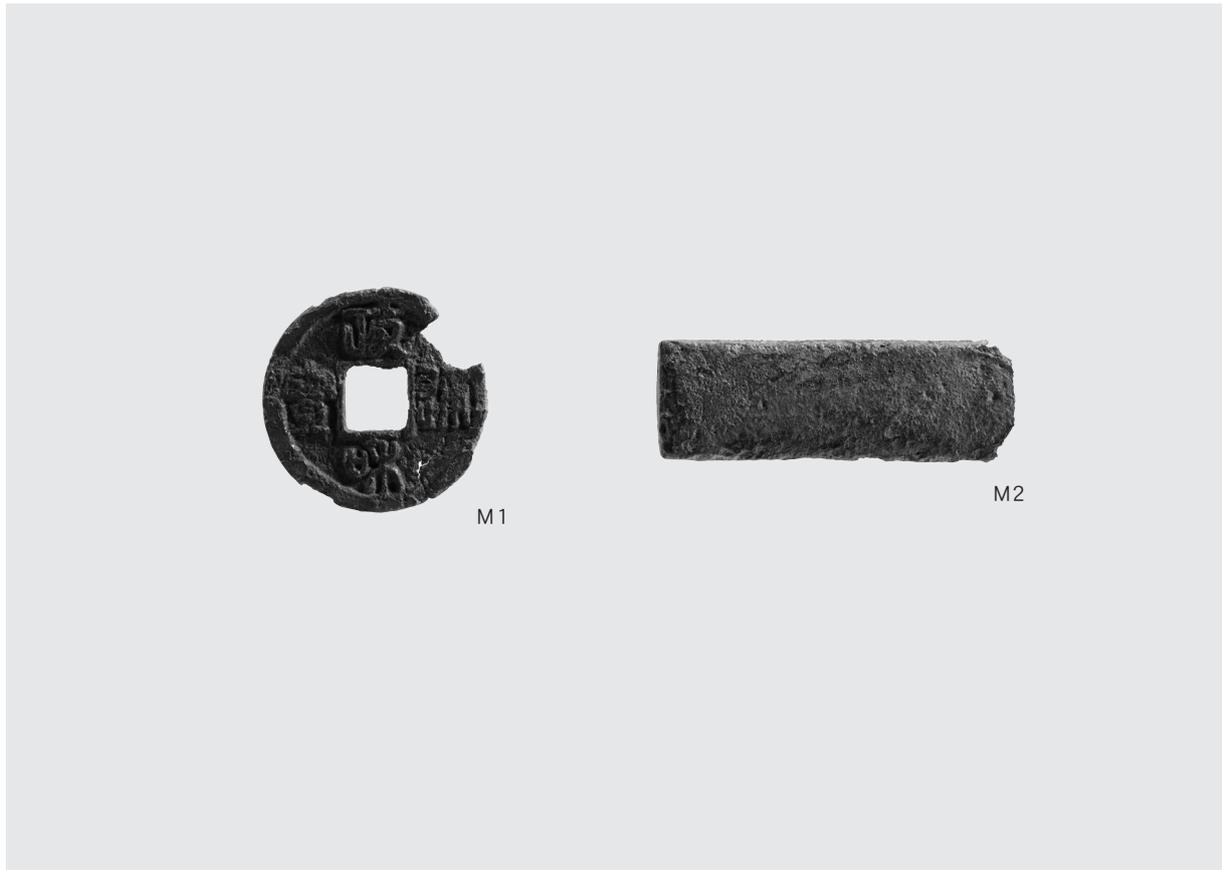
⑧清間遺跡 SD-4 西部埋土土層断面 (南東から)



清間遺跡 出土土器類（外面）



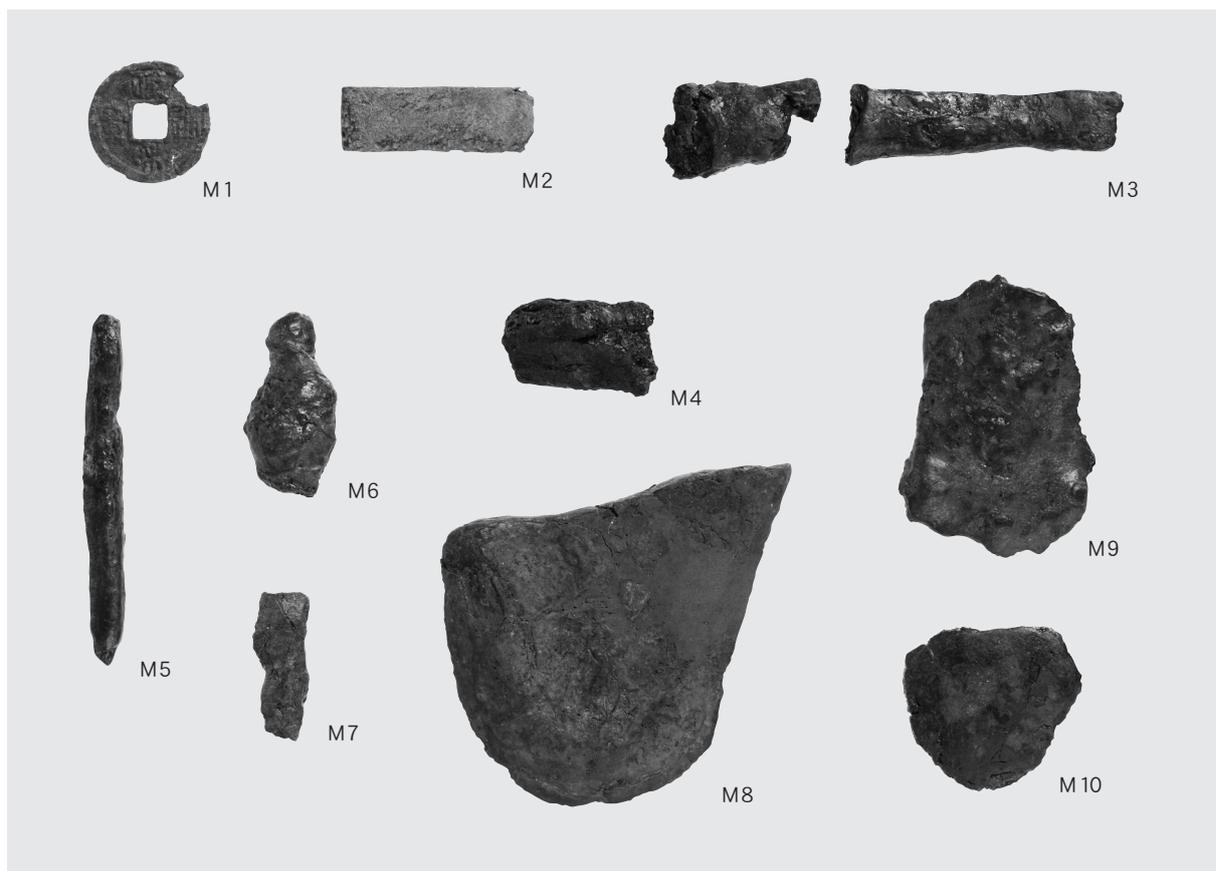
清間遺跡 出土土器類（内面）



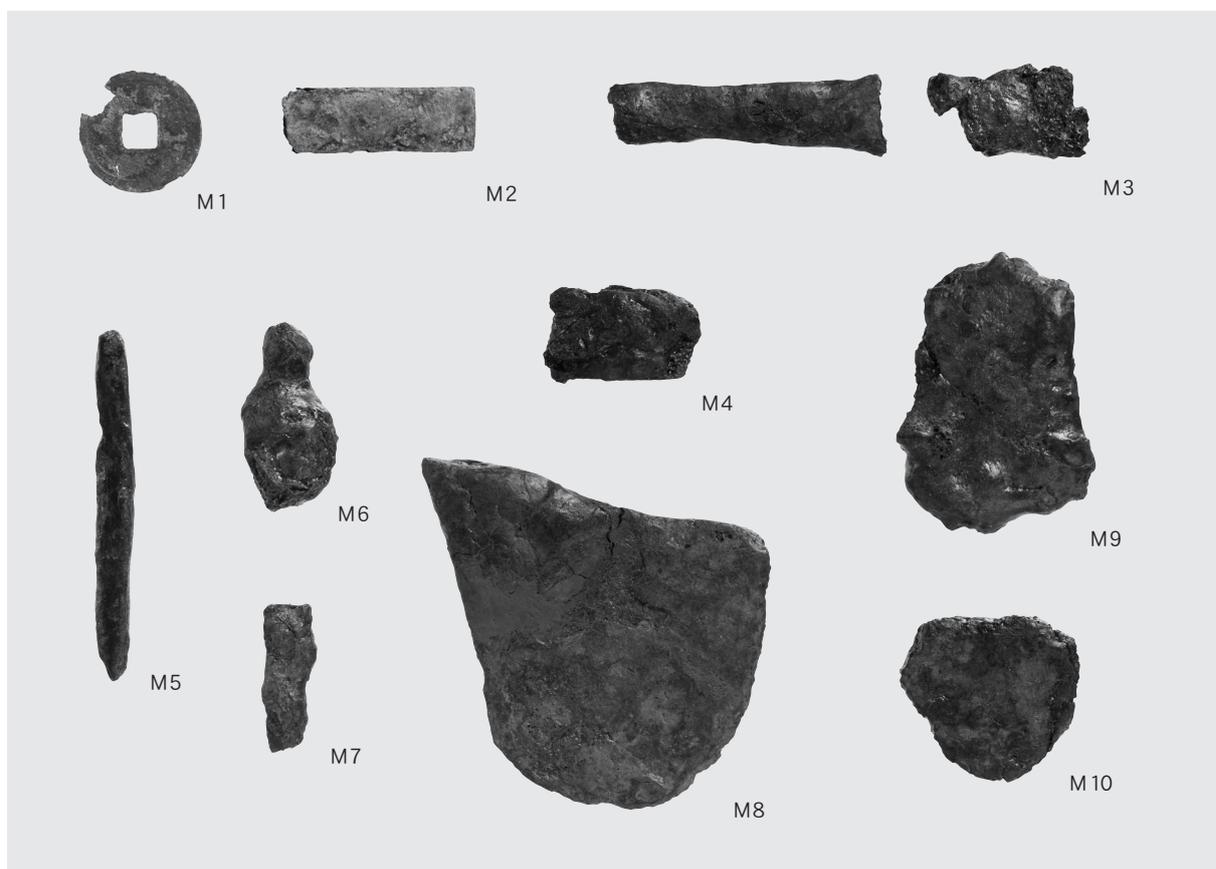
清間遺跡 出土銅製品



清間遺跡 出土土師器



清間遺跡 出土金属器 (A面)



清間遺跡 出土金属器 (B面)



三木田池遺跡 調査区全景（東上空から）



三木田池遺跡 調査区全景（北上空から）



三木田池遺跡 調査区全景（南から）



三木田池遺跡 調査区全景（北東から）



三木田池遺跡 SB-1 全景（東から）



三木田池遺跡 調査区西壁土層断面（東から）



①三木田池遺跡 石器S27 出土状況（南から）



②三木田池遺跡 サヌカイト剥片出土状況（南西から）



③三木田池遺跡 削器S13出土状況（北から）



④三木田池遺跡 磨石S41 出土状況（東から）



⑤三木田池遺跡 磨石S40 出土状況（北から）



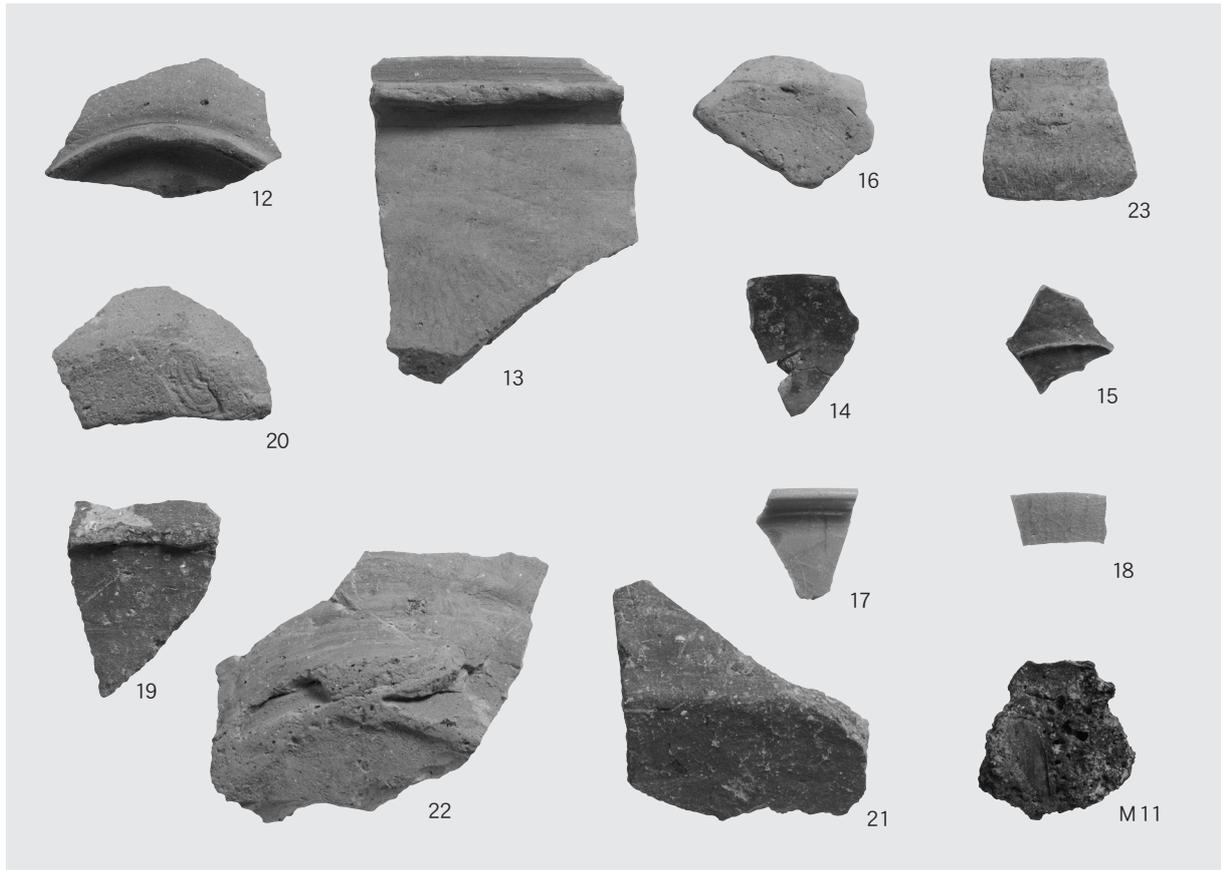
⑥三木田池遺跡 敲石S39 出土状況（北東から）



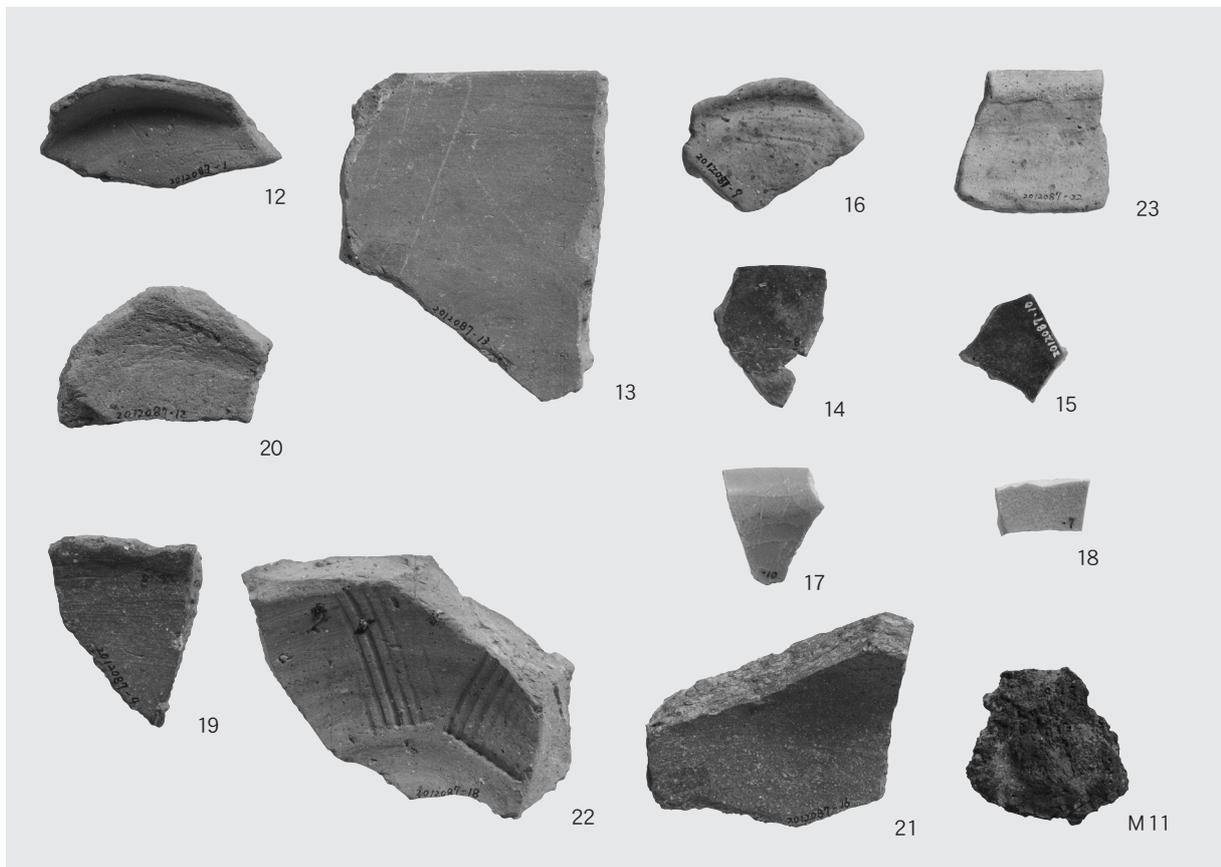
⑦三木田大池 石器採集地点1 遠景（南から）



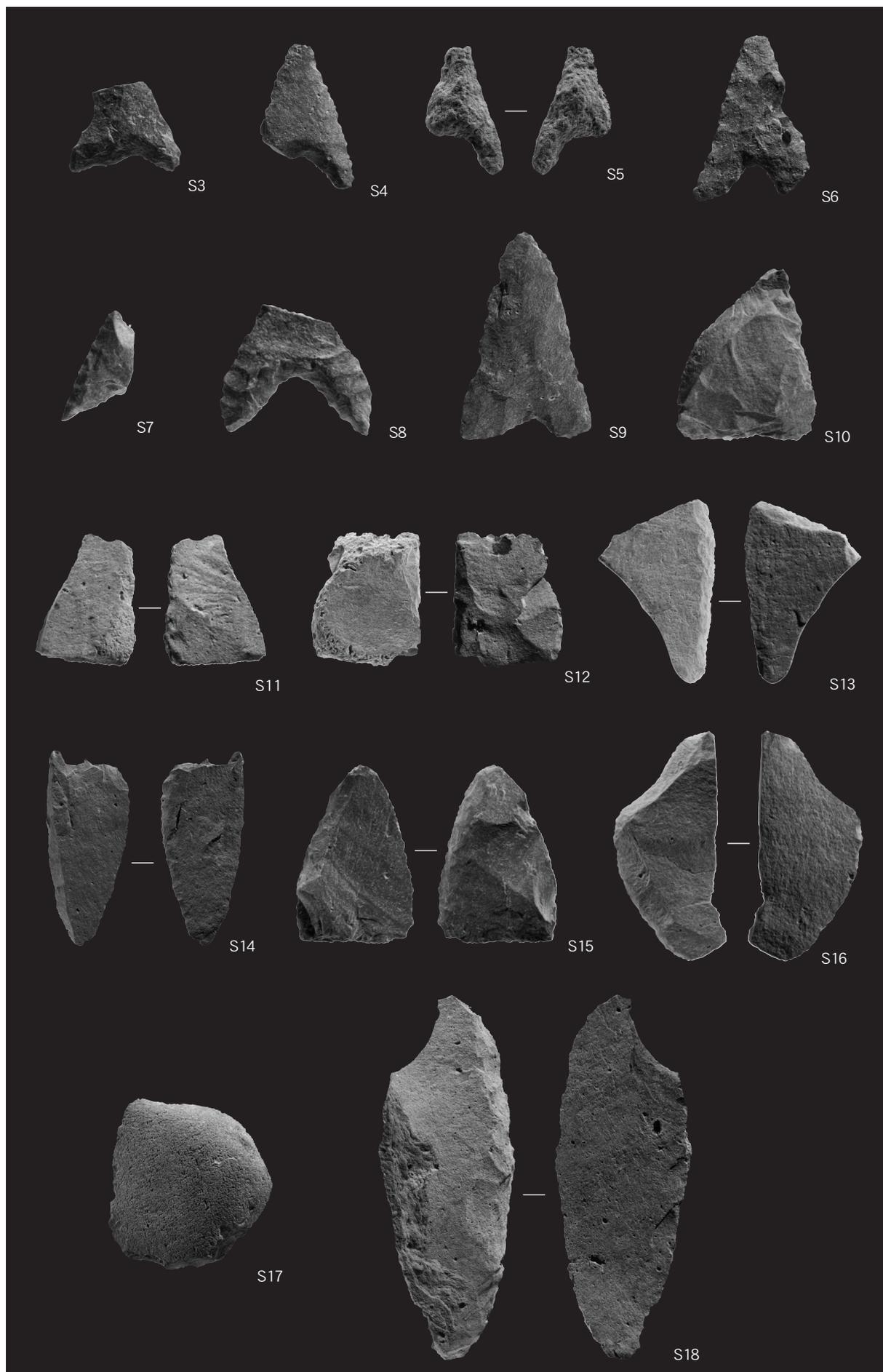
⑧三木田大池 石器採集地点1 遠景（南西から）



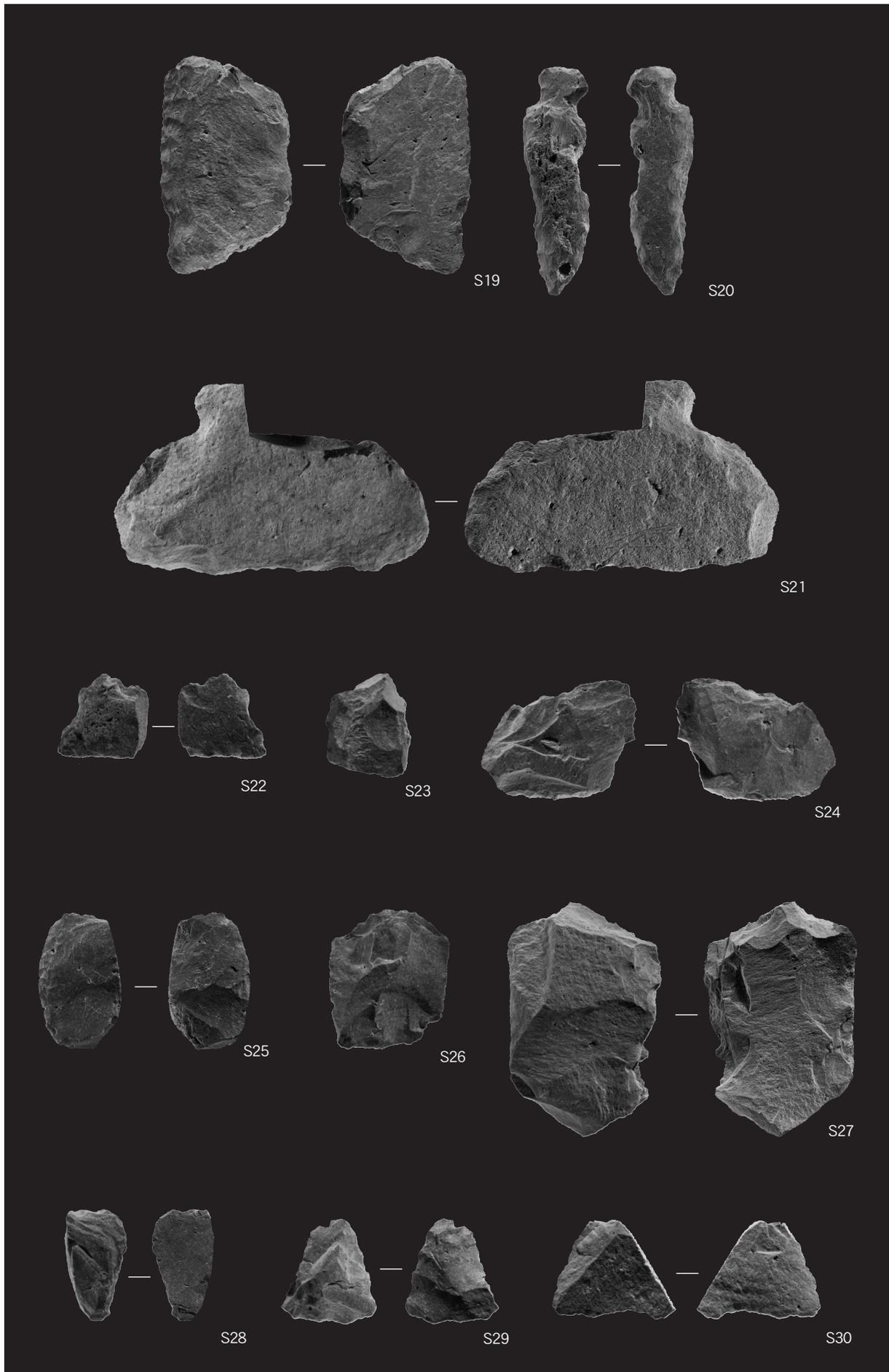
三木田池遺跡 出土土器等（外面）



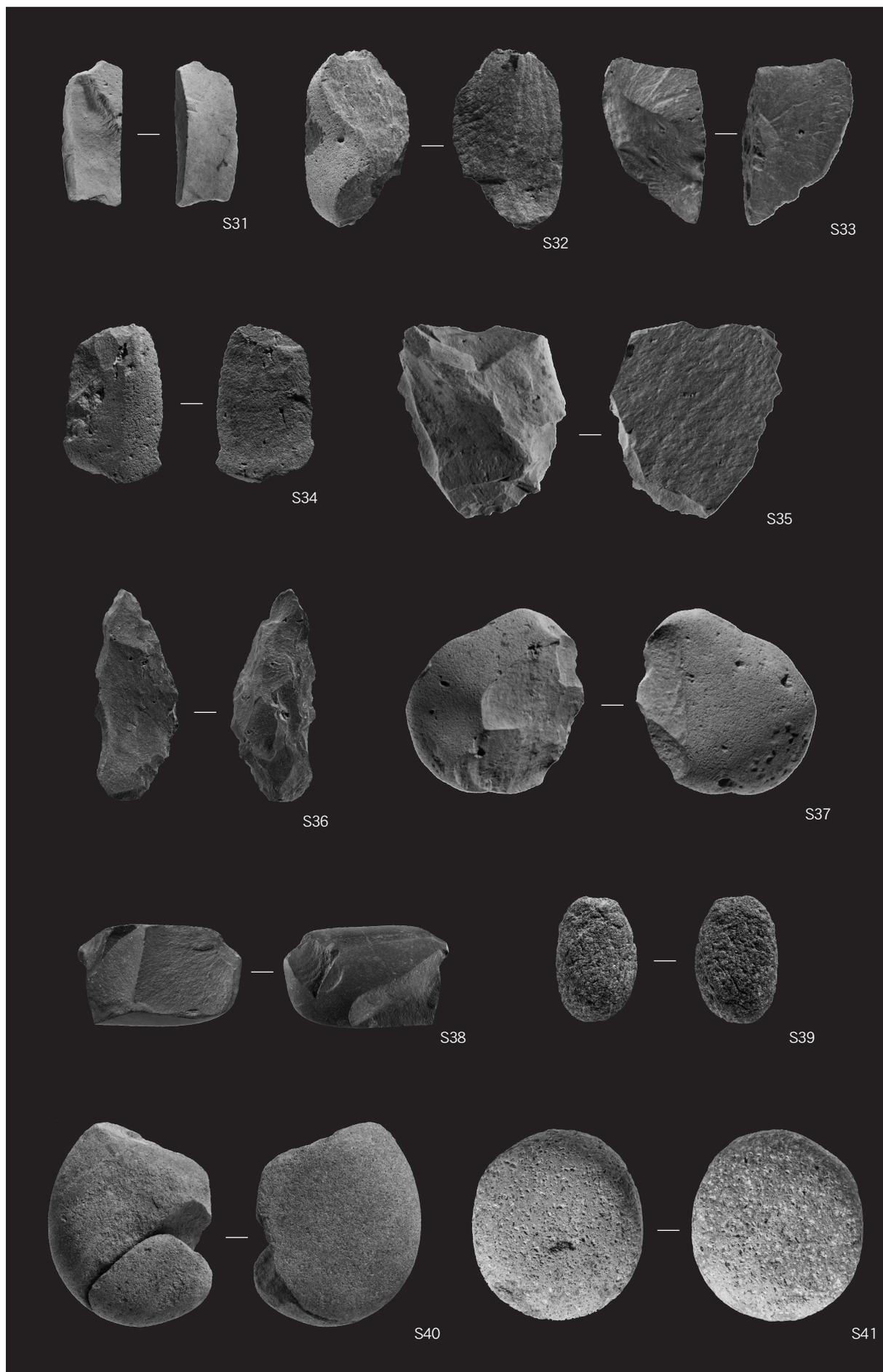
三木田池遺跡 出土土器等（内面）



三木田池遺跡出土・三木田大池採集 石器(1)



三木田池遺跡出土・三木田大池採集 石器(2)



三木田池遺跡出土・三木田大池採集 石器(3)

報告書抄録

ふりがな	せいまいせき・みきだいけいせき								
書名	清間遺跡・三木田池遺跡								
副書名	主要地方道洲本五色線（三木田バイパス）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第476冊								
編著者名	岸本一宏・久保弘幸								
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部								
所在地	〒675-0142 <small>ひょうごけん か こくんほり まちうおおなか ちようめ ほん ぐう</small> 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）						TEL079-437-5561		
発行機関	兵庫県教育委員会								
所在地	〒650-8567 <small>ひょうごけんこうべ しちうおうくしもやまてどおり ちようめ ほん ぐう</small> 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号						TEL078-362-3784		
発行年月日	平成27（2015）年3月23日								
資料保管機関	兵庫県立考古博物館								
所在地	〒675-0142 <small>ひょうごけん か こくんほり まちうおおなか ちようめ ほん ぐう</small> 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号						TEL079-437-5589		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
せいまい 清間遺跡	すもとしなかがわらちようみ きだ 洲本市中川原町三木田		28205	060036	34° 21' 45"	134° 52' 2"	20120816 ～20120925 (2012086)	559	記録保存調査
みきだいけ 三木田池遺跡	すもとしなかがわらちようみ きだ 洲本市中川原町三木田		28205	060035	34° 21' 34"	134° 52' 6"	20120829 ～20121013 (2012087)	700	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
清間遺跡	集落跡	中世中頃	掘立柱建物跡・溝		土器・陶磁器・石器・金属器				
三木田池遺跡	集落跡	中世中頃	掘立柱建物跡		土器・陶磁器・石器・鉄滓				
清間遺跡 要約	<p>清間遺跡で検出した遺構は、下段では西半部に偏っているが、掘立柱建物跡と多数の柱穴および溝を検出した。溝は掘立柱建物跡と並行方向であることから、建物跡に伴う可能性がある。ただし、東西に近い方向の溝は建物跡を超えてさらに東側に続いていることから、調査区上段の溝と同様の機能を有している溝であったのかもしれない。掘立柱建物跡は南北2間（6.0m）以上、東西2間（6.0m）以上の総柱建物跡で、西側用地外および南側調査区外にひろがっている。柱穴から出土した遺物により、時期は中世中頃であると思われる。また、掘立柱建物跡の東側には建物と平行して南北に並ぶ柱穴が存在しており、建物跡に関連する塀や柵が併設されていた可能性がある。また、その東側には柱穴や南北の溝および土壌が存在しているが、南北溝が調査区の南側に続いていることはほぼ確実で、掘立柱建物跡やその他の遺構も同様に、調査区の南側の道路用地内にも続いて存在している可能性は非常に高い。</p>								
三木田池遺跡 要約	<p>中世中頃と思われる掘立柱建物跡や柱穴・溝・土壌を検出した。 三木田池遺跡では、調査区北西隅部分に限定して小規模な掘立柱建物跡1棟を検出した。時期は中世中頃と推定している。三木田池遺跡では洪水砂が20～30cmの厚さで堆積しており、その砂中には多数の縄文時代石器が中世末の土器片とともに含まれていた。この洪水砂は14～16世紀の間に起こった洪水により堆積したものと推定されるが、本発掘調査区が三木田池から流れ出る小河川のすぐ南側に位置していることから、調査区の上流側にあたる現三木田池付近に縄文時代の集落跡が存在し、そこから洪水によって流出して堆積したと想定される。なお、三木田池畔において、南西方向にのびる小尾根の先端にあたる位置で縄文時代の石器を多数採集した。あるいは、その一帯に縄文時代集落が存在しており、洪水の際にそこから流出して調査区の一帯に堆積したのかもしれない。</p>								

兵庫県文化財調査報告 第476冊

洲本市

清間遺跡 三木田池遺跡

－ 主要地方道 洲本五色線（三木田バイパス）
道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成27（2015）年3月23日 発行

編集 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 明石市樽屋町6-6
